

前略草々 はじめます



稲刈りが始まったのを見つけたのが、8月19日の仕事の帰り。

汽車から降りて駅を抜けだしたところの田んぼがすっかり刈り取られていてちょっとびっくりした。たくさんのカラスが落ち穂を拾い回している。

高温注意報が発令される日が続く。しかし、毎朝、日の出前の空気は少し落ち着いてきて、真夏に信州で朝を迎えたときのように冷やっとしたものを感じる。単純なもので、それだけで嬉しい。暑い夏とはそろそろ「さようなら」だ。

長い間書いてきた「塵埃秘帖」をこの夏で終わりにして、「前略草々」というふうにつけ直して、これからまた書こうかと思う。

深い意味は全くない。変化球を投げ続けたので直球で勝負をするのか、またその逆か。

むかし、週に1回駅前で路上でライブをやっている若者のことを書いたことがあったかもしれない。歌やギターは上手で人気もあるようだから大いに結構なんだが、毎週歌うのだから進歩というより進化をしなくてはならない。これは生き物に与えられた大きな使命であり、生き続ける条件なのだ。

で、その若者は、進化しているのか。そういうことを考える。もしも進化していないなら、決断をして別の道を考察しなければならない。進化していれば、新しい道を探って飛び立つ準備をしなくてはならないだろう。いつまでもそこで歌っていてはいけないのだ。

わたしがバイクをひとまず置いて(乗るのをやめて)、他のことを始めようと思ったのもこの辺りの考えが原点だ。

わたしの「おとう」はたった67回しか迎えられなかった秋に、どうやってすればおいしいお米を収穫するすることができるかを考え続けた人だった。

ふだん、ビールなど滅多に飲まない人が、お米を収穫した晩には飯台にあぐらをかいて美味そうに飲んでいた。わたしは、あんな苦くてまずいものを……と書いていつも見ていた。モノクロの思い出だ。

2013年8月21日(水曜日) [【随想帖 II】](#)

全力恋愛

このタイトルは素敵な言葉でしょ。[sitoo](#)というブログの高村砂名さんがそんなタイトルの日記を書いています。すごくワクワクする魅力的な言葉だと思う。

彼女は失恋をして、まあその報告であり、個人的なところには踏み込むものでもないと思うが、一方で彼女は「ホジキンリンパ腫」という血液のがんを治療中のカラダでもあって、重病と闘っている人です。

ブログは人生の日記でもある。

恋愛だけでなく、愉しく充実して生きていくこと自体にも全力で打ち込んでいる。わたしの母が大腸がんに罹って、お医者さんにその話を聞いたときにわたしはカラダが震えた。正直、自分が紙屑のように思えてきたこともあった。そうまでさせてしまった「がん」という言葉をさり気なくブログに書いている、とっても魅力的な子なのだ。

この人は若くてエネルギッシュで、いろんなことを考える思考回路にゴミや泥がついていないなあ、と日記を読んでいて感心する。難しいことはわたしには何も言えないが、この人にはいわゆる雑念や欲がなくて、ときには未熟で何か足りなくて、危なっかしいこともあるけれど、割と堂々としている。

ブログを読んで遊びまわっていると、自分を見つめるのに絶好のテーマを与えて下さる人々と出会う。その人々に出会う一歩手前(その人にジャンプしてゆくためのブログ)では、また素晴らしい感性の持ち主に出会っている。

こうして感動を積み重ねると、わたしにも厚みがついてくるような気がする。勇気も分けてもらえる気がする。弱虫もあほんだらも治ってくれるとええなあ、と思いながら、何度でも拝読しに来る。

何にも書けなくて、気の利いたことのひとつでも残したいけど、ふむふむと学ばせてもらって帰ってゆく。

全力。あらゆるものに、理屈抜きで打ち込んでいるときに美しい。

2013年8月24日(土曜日) [【随想帖 II】](#)

空回り秋風吹けばなおのこと

[三重県熊野市紀和町西山地区のFacebookページ](#)を見て、文明というものは(暮らしなどを)便利にする何かなのだ、と勘違いをして30年も40年も突き進んできたことを、私たちは反省しなくてはならないのだと痛切に思う。この地域の発信情報だけではなく、日本中で活動をするこのような多数決で切り捨てられる人たちの熱意を無にしたくない、と大勢の人々が今、思い始めている。社会を動かせるようにするには、幾つもの工夫が必要で、限りないチャンスをくまなく生かすことも重要となってくる。

▼山里を訪ねし人の深呼吸



(8月28日: Facebookページから)

▼空回り秋風吹けばなおのこと

お盆が終わるころに列島を襲った熱波はひとまず引いていった。

夜半過ぎに窓を閉めねばならぬほどの涼しい夜が訪れるようになってホッと一息ついたのだが、また少し暑さが戻っている。(29日ころ)

あのときの暑さには憎しみさえ感じたが、涼しくなれば許してやってもよからうと思っているから、人間はアホとしか言いようがない。

秋風が吹けば、嬉しい半面、我儘になってまた季節の小言をぶつぶつというのだろう。

心が空回りをしているなと感じることが屢々ある。

++

▼ほんとうに伝えたいこと言えぬまま

残暑見舞いも出しそびれている。

初盆にお供えを送ったら礼状を頂いき、簡単な挨拶をもう一度送りたい人がある。

50歳をまさに1歩か2歩、歩き始めたところでガンに罹って3ヶ月でこの世を去った(ツマの)友人。ここで便りが途絶えてはお墓にお参りに行くことさえできなくなってしまう。

秋風が吹き始めるころ。

こんなにまで人を恋しいと思うものだったのかと、ふと身に迫る。

数々の人々にお世話になり、元気でいるときはそれほど掛け替えのないものだとも感じず、遠くに離れて暮らしていれば(かつて親友と固く肩を組んだ仲であっても)便りが途絶えるのも仕方なの無いことであるのかと諦めてみたりもしている。家族があれば尚更で、誰しも身の周りの手の届くところで掴んだ幸せが一番大事なんだろうと妙に納得をしたりしていた。

確かに幸せとはそんなものだ。

最初は兄弟、次に父母。そして夫婦、子ども。最後には孫。限りなく細くなってゆく生命のつながりを辿って愛情は未来へと延び続ける。

やがて切れる。

切れて消滅してしまえば、霊になるのか仏になるのか、幽霊になるのか神に裁かれるのか、全く想像もつかないのであるが、数々の自分の犯してきた無礼のカードが襲い掛かるようなことも想像してみる。

++

▼シッポナがよそ見しているラブレター

思いついた理由はナイショにしておく秋だから。

2013年8月30日（金曜日）【[随想帖 II](#)】

タブラー



8月30日(金)

タブラーが届いた。

しょうこさんが

私にくれたの。

しょうこさんは

お嫁に行くの。

淋しいけど

幸せになってほしい。

■□

□■

ちょっと叩いてみたけれど

むずかしい。

どーしょー。

ムラサキがおはようさんと月曜日



朝露に濡れているアサガオを見ると
書きかけの恋文の続きを書かなきゃ
と思うのですが、なかなか。

情熱に燃えて人を愛しているときや
唄んでいるときって、
自分でも驚くほど名作が書けたりする。

もちろん名作と言っても
自分で気に入って満足するだけなんだけど。

紫色は嫌いなくせに、
今の前の車は少し紫がかった色だったし
キキョウが一輪挿に生けてあると間違いなく立ち止まってしまう。

そうよ。
きょうは月曜日で
昨日は、ある人に誕生日おめでとうってメッセージを書いて

いい朝迎えて、
ムスメさんは防災訓練で職場に早朝集合が掛かって早く行ったし
ボクはひとりで駅まで散歩を兼ねて歩いてきた。

▼ムラサキがおはようさんと月曜日

去年、根本から切られたイチジクも大きくなっていった。
いい匂いがした。

雨が降っていようが全然ブルーにならない。



2013年9月 2日 (月曜日) [【随想帖 II】](#)

夜もふけて障子を閉める音に秋

▼煙草燻らすキミに便り溜め

9月2日の朝の列車の中からそんなことをつぶやいていた。[砂女さんのブログ](#) (句)を読んで感想をまとめられていないので、ああ、忙しくもないのに何を後回しにしているのか、と考えたのだろう。

宮崎駿が監督を引退する記事がこの日の朝刊1面に小さく載った。わたしは、「引退なんてしなくてもいいと思う。芸術をする人が引退って、どんな概念なんだろう。感性を止めることなどできない。」とメモをした。

▼九月雨口笛ふいて上を向く

暑かった夏を忘れて、寒くもない今の季節である。

雨は、悲しい雨の歌を生んだ一方で、昔職場にいた明るいA子さんという女の子は「悲しくなんか無いですよ、雨に歌えば♪という歌があります」とケラケラ笑った。彼女はT君という人のお嫁さんになって、Tくんは京都の才社のニュース記事にまで出てくる人になっていった。彼女の明るい人柄が生きているのだと信じている。

そんなことを思い浮かべながらわたしは上を向いたのだった。何故上なのかは物語に任せよう。

鈴虫がお題(季語)にあがっていた。砂女さんは

□ [996](#) 鈴虫の声する方が帰る方 砂女

と詠む。わたしはコメントに

わたしの父は事故が原因の病気で耳が殆ど聞こえませんが、人生の大半をそんな耳で暮らしてきた人でしたが、鈴虫を愛している人でした。生き物(動物・植物)を大事にしたという人と言う方が正しいかもしれません。

と書き始めて想いの続きで何を考えていたのか綴らずに返信してしまっている。ま、それはそれでいいか。

2日の晩は、雨が降っていたのか既に止んでいたのか記憶に無いものの、わたしは窓を開けていつものように寢床から路地を見下ろして涼んでいたのであろう。向かいのおじさんが縁側の戸を開け放ってテレビをつけているのが見下ろせる。そろそろお休みの時刻も近かろう。

▼夜もふけて障子を閉める音に秋

秋風は麻薬のようにわたしに纏いつき、優しく撫でていきます。

こういう時間(時期)はだいたい短いもので、まあそれでよろしい、人生は。

そんな風にして、エアコンもなく寝苦しく過ごした夏を許して、冬を迎える支度をするのだ。



2013年9月 4日 (水曜日) [【随想帖 II】](#)

優しく包む魔法

この街に暮らす理由も故郷に帰る理由もなくミカン食む
これは「[それはそれは](#)」(おとも)さんのなかから引いた。

—
私は文芸に口出しを出来るような才もなければ技もないし、素養もない。大学在学中に必須として単位取得が危ぶまれ卒業直前の試験の答案に「就職が決まりましたので何卒単位をください」と書いた科目があって、それが今一番仕事で活用されているような皮肉な人生を歩んでいる奴です。そんな私が書くのだから、すっからかんの中身だろうって思っておいてください。

しかし、この人の作品が私の触手を止めるのには訳があるのだろう。突き放した悲壮感や、自分を憐れみながら讃えている自信のようなものと諦め。しかし劣等感に似たものはない。だが、自分のもつ美を発散する強いパワーが有る。嘘っぽい冷静さのようなものもある。そんなことを書いたら狡くて悪魔のような人？となる。

そしたら、彼女自身が

「自分の中にずるくていやらしい甘えた部分があって、なにかうまくいかない時、それは震災や誰かや何かのせいではなく、自分のそういう部分が原因なんだって、ほんとうは気づいてる。」

と書いている。別に膝を打つほど共鳴したとまで言わないけど、私はこういう冷たい視線のヒト(女)にす一つと興味を持って、結構抜けられないファンで居たりする。

□■

人生においては、(あらゆるものを何かと)否定をしてはいけないというのが通説だ。このうたは「理由もなく」と歌う。否定で切り入る。「故郷に帰る理由を抱きミカン食む」ではないのだ。

私にはわからないけど、短歌を評論する人の間では常識的な物があるのかもしれないけど、否定は好きです。それが持つインパクトと不平や不満のようなものがそこにある。

自らが持つ、自信と劣等感、自己顕示欲、そして嬉しがり屋で寂しがり屋、さらに、泣き虫で頑固さ、それに素早さと慎重さなど。そういうものが、この世界には大切と思う。

++

ええ？

歌人にはその中の何が最も大事ですか？

そういうアンバランスで捻くれているモノを、優しく包んで魔法にかける力でしょう。私はそう考えています。

栗きんとん



かれこれ20年以上昔のことですが、せっせと信州にツーリングに行っていたころがあります。GWと夏休みは、四国と東北に行っていましたから、それ以外のときに行きました。

秋の味覚と紅葉を訪ねて中山道をひたすら北に走って、疲れ果てていても、またその道を帰ってきました。ときには飛騨方面の道であったり三河の山道であったりしたけど。

中津川の人影も寂しい小さな土産物屋さんでバイトの人と話しているときにその人の口からこぼれた店の名前が「すや」「川上屋」の二つでした。

そのときに初めて行った「すや」さんは駅前の小さな和菓子屋さんの雰囲気、ゆきずりの旅人なら間違いなく通りすぎるような店でした。

時代の波に共鳴できたのでしょうか。今はどちらの店も行列のできる立派な店になりました。

こういう素朴な味をそっと、ひとりの人に届けるためにある店ではなくなってしまったという印象がありますので、ほかの素朴で小さな店を見つけるために街道を歩きたいなとも思います。

今の時代を生きる私たちの国の人たちは、テレビやスマホから数々の情報を得て、それを纏いながらゆきます。

でも、旅には出会いが付きもので、出会うものが何であれ、予測のないものでなくてはならないのだと思います。

この栗きんとんの味を創り出した人やその心、暮らしに少しでも触れてみたいから、纏うものを脱いで旅に出たい。そう思っています。

理屈めいたことは「花も嵐もシリーズ」にゆずりますね。

キスのフライ

朝夕がとても過ごしやすくなり、夏から秋へと季節が移ろうようすを肌身に感じます。食楽・健康・読書・スポーツなど、身体がいくつあっても足りないほど誘惑に満ちているのですが、秋は短く感じられます。



13日のおひるは、キスのフライでした。

□■

2020年に東京オリンピック開催のニュースは多くの国民を釘付けにしました。

ちょっとそのときに(暇なので)、我が家の本棚の奥をゴソゴソとしていて、偶然に手にとった小説が昭和37年発行の松本清張「黒い樹海」でした。昭和35年ころの東京が描かれています。出てくる列車はもちろん蒸気機関車で、自家用車も少なく、都心から東京都の外れまでを車で移動するようすを「桑畑の中を突っ切って」などと書いています。

遠藤周作の小説を読んでいても世田谷の住宅街にはまだまだ沢山の自然に囲まれた里山があったことがわかります。

武田百合子の「富士日記」にもその頃の自動車事情が伺える箇所が幾つもあったのを思い出します。武田泰淳は東京オリンピックの年に富士山麓に別荘を建て住み始めました。そのころのようすのわかる人が読むと、文学とは別に、ひと味違った面白みが楽しめます。

身近な生活環境でも昭和を思い出すものが幾つかあります。今の季節ならば「すすきぼうし」や「はさ掛け」などは懐かしくなりつつあります。なかなか見ることができなくなってきました。

オリンピックがある2020年のころ、このような自然や社会の姿はどんな形に変化しているのでしょうかと考えるとちょっと楽しみです。(当県での国体も2021年にあります。)

2013年9月13日(金曜日) [【随想帖 II】](#)

嵐去り濡れた戸板をそっと拭く

▼嵐去り濡れた戸板をそっと拭く

[9月16日](#)にこんな句を残している。

」」

ふっとそんな言葉が蘇った。情景が頭のなかに散乱する。

昭和34年には伊勢湾台風。その2年後の9月16日には第二室戸台風がわたしの地方に大きな被害を与えた。

2回あれば、それは「たくさん」と呼ばれるように、この後9月16日は台風がよく来る日になってゆく。秋はやれやれとひと息をつく油断の時だ。稲の収穫も控えてもう一頑張りをするためにバックシングをしているような一瞬を狙って嵐はやってくる。

今の時代は、コメの品種改良が進んで、背が低く風にも強い米が考案されている。コシヒカリは、風水害に弱く、秋の嵐で打撃を受けることが多かったのだが、現代ではこの9月16日までに刈りとってしまえる農家も多くなってきた。

」」

16日の朝に襲いかかった台風18号は、当地方に強風こそ吹かなかったものの、雨は夜通し降り続いた。台風の雨には風格がある、とさえ思うほど雨戸を打ち続けた。一部の地方では突風や竜巻を引き起こし、また別の地方には大雨をもたらして、全国的に浸水被害のニュースが相次いだ。実家のある車折付近から嵯峨・嵐山にかけても避難指示が出たという。嵐山の旅館街では今までにない水害となっている。

タイトルに書いた「戸板」だが、このごろはどこにも見かけることはなくなった。アルミサッシが当たり前で、嵐の前に家中の窓に戸板を打ち付けていた時代を知る人も殆どいなくなった。

敬老の日を迎えた9月中旬、65歳以上が4分の1であると報道するのを聞きながら、そんなに大勢の年寄りがいるのだと驚き、戸板を知っている人も僅か4分の1であると寂しくも感じた。

子どものころは家の台所の土間は広く、中を三輪車で走り回れるほどの広さがあった。外のトイレには出られぬため、その一隅に担桶を置いてトイレの代わりとし、居間にはろうそくを1本灯し、みんなで寄り添って台風が過ぎ行くのを待った夜があった。

自然に畏れをなしていたけれど、媚びているところもなく、負けているわけでもなかった。こういう夜を思い出す度に、人類は強くなったのだが、ある面ではそれは虚像だと思わざるをえない。被害のニュースが引っぱり無しに続く。



なすび



9月19日(木)のおゆうはん。

暑かった夏も終わって、
やれやれとひと息ついています。

なすびがおいしかった夏や初秋から
肌にキリッと冷気の染み入る秋になり
食べ物の趣が少しずつ変化する。

寒さに備えてエネルギーを取らなければならないと
古代人が考えたはずはないのだが
自然というものは不思議なもので
口を肥やすようなサンマであるとか
食後の満足感を最上に満たすような甘い果実などがおいしい。

■
先日、家に顔を出して母になすびをもらってきた。
新米はまだついてないから今度来たときにしい。
今年もなすびは終わりやな。しまいのなすびや。

そう言ってなすびを袋に20個ほど入れてくれた。

わたしだけの台所なら、
それは間違いなくほとんどを漬物にしてしまうのだろうが、
生き方の違いでそうも行かない。

煮浸しを食いながら花かつおを探している。

今朝はまたあの人想う彼岸花



▼悲しいと書いて直した恋しい赤

23日に「[恋しい赤](#)」と書いたのは、誰にも言わない理由があったのだろうが、それはそれでもうそのうち忘れてしまっても構わない。

わたしには不安と心配があった。それは、これらの喜びや悲しみ、憎しみなどの感情が、やがて消滅してしまうことだ。いつとき、この心配が募って頂点に達し、この上なく焦っていたのだった。

写真は通勤列車の車窓から。
もう赤い花も枯れ始めている。

__//
_//
_//

何も焦ることなどなかった。

28日につぶやきで

▼今朝はまたあの人想う彼岸花 ▼彼岸花燃え尽きてゆくちりぢりに

を書いてから、ぼんやりと過ごしてみた。

今年、4月1日に「[雷山無言](#)」に書いた

「[恩を返す](#)」を読み返してみたりして、自分のブログには纏まりが欠乏しているし、不要なことが多すぎて焦点がピンボケになっていることを反省している。

アンダーラインなどを引いてみたので、今一度、立ち寄っていただけるととても嬉しいです。

そんなことをしながら、ブログに隙間をあけている。

昔は半月に1回ほど、[裏窓から](#)だけを書くことを愉しんでいたのに、歳を重ねると苦言が多くなるのは致し方ないことか。さて、「花も嵐も」の続篇を書こうかな。(これも纏まりがなくポイントもなく連続性にも欠けているが)

そんなことを考えている9月の暮れです。

2013年9月29日（日曜日）【[随想帖 II](#)】

認めあう

「長く続く(不倫の)カップルは「お互いが、本当に認めてほしい部分を認め合っている」

「不倫をする男性が、彼女に求めるもの」という題名がついたネットコラムで見つけた一節だ。不倫のネタで話を引きつるようとしているが無関心なので大幅にカットして読み進むと、的を得たことを書いている。

結婚したくても思い切れない、いい人と出会えない人が読んでも面白いし、視点を変えて自分を見つめてみるのにも良い題材だと思う。

■ ■

□

一般論に書き換えてしまえば、ヒトが、恋愛的な付き合いを求めるのは、その人自身に何らかの問題を抱えていることが多い、という。

つまり、問題を抱かえていなければ、外に恋愛的な付き合い(不倫や浮気)を求めないというのです。

夫婦がお互いを認め合っている(または認めっている部分を多く持っている)ならば、不倫や浮気はしない。

ヒトは自分の中にある「本当に認めてほしい部分」を理解してくれる人を求めていることが多く、その点を改善すれば心のつながりが得られるという。

■ ■

□

ヒトが結婚をすることは、社会的使命であると。そう私は言い続けてきた。

子どもをもうけて育てて、家庭をまとめて、社会参加をすること。

そして、子どもを大きく立派にして社会に出して貢献させ自分も貢献する。子どもは、子孫を繁栄させて、未来の社会を作る一役を担うこと。

だから、結婚をしないで社会でダラダラしている人を少し辛辣に叱ってきた。

人それぞれ事情もあるから何でもかんでも叱るつもりはないし、現代社会のアホな側面が若者の心を蝕んだりしているので、救ってあげねばならない面もある。しかしながら、現代の若者は(しかも結婚から遠ざかっている人は)ちょっと自分の方ばかりを見詰め過ぎているのではないか、と気に掛かる。

それを「ゆるやかな自己主張だ」というような言い方もできるのだろうけど、個人主義という言葉が生まれたころに、そこにある個人そのものを自分に当てはめて中心に置いてあらゆるものを組み立てていく気風が出来上がってしまったからだろう。決して間違いではないのだが、間違いだと言い切る意見が出て見つめ直すチャンスを失ったことによる損害が大きい。

ブログだってツイッターだってケータイ電話だって、テレビドラマもクイズ番組も、お笑いも、全部自分の方を向いて構成されているのだ。

私がこれまで何度も書いてきた「お鍋を食べるときに絶対に自分の皿に自分の食べる分を装わずに食事を進める」というルールを、日本の社会のあらゆるところに取り入れていけば社会は必ず変わってゆく。

本当に認めてほしい部分を触れ合わせることが出来ないという難題も、容易く解決できるのではないか。

どうぞ、想像してください。



2013年10月 7日 (月曜日) [【随想帖 II】](#)

ふるさとの柿はどちらも豊作で



私が中学生だったときに父が日曜大工で我が家の庭の一角に2階建ての離れを建てた。1階にはシャッター付きのガレージと6畳間、トイレ、井戸があった。2階には4畳半と8畳間があってベランダもついていた。もはや日曜大工というレベルではなかったのだが、40年ほどみんなに愛されて、このたび、取り壊して更地にしてしまった。

その一角に大きな柿の木があった。たーちゃんの柿と家族で呼んでいた。おそらく、叔父さん(たーちゃん)が就職したころに植えた柿ではなかろうか。

その叔父はいま脳梗塞で倒れて[リハビリ療養中](#)である。

数知れずこの地に帰り、遠き時間に思いを馳せ、止めどなく生家を想い続けたふる里の柿の木に、その叔父の名前をつけて父(自分の兄)が呼んでいたことは本人も知らないだろう。それを知る人は、今では母と私くらいになってしまった。

人が年を経て滅びていくことは人類の宿命であるから仕方のないことだ。しかし、忘れられてゆくことをすべて認めるのは辛い。

それと何よりも、豊かさに満足した多くの人(社会)が(自分たちの幸せばかりが大切に)、忘れてはいけないものを分別する力を失ってしまっていることが悲しく寂しい。忘れてからでは取り返しがつかない。

歲月人を待たず。

ふる里に残った柿は残すところ1本である。次は誰の番だろうか。

—

(砂女さんの歌から)

[盗む子も啄む鳥も絶ゆ柿の如く実れる重きしむら](#)

タイトルで辿る人生論

[第一期: 人生なんて]

(パーな会社の一員として働いて学んだこと)

- まじめに生きても成功するとは限らない
 - 世の中は頭の悪い奴でも得できる
 - ビリでもキレとズルでのし上がれる
 - 上司になったら威張らねばならない
 - 上司はできないとわかっていても命令をする
 - 部下を叱るやつほど甘い自分をごまかしている
 - 優等生には爆発的な企画力がない
 - きちんと仕事をすれば必ず騙される
 - 真面目にすれば利用される
 - 本音を言い続けるとそれを悪用して陥れられる
 - 人を褒めてる奴は陰で倍ほど悪口を言っている
 - きれいな職場の裏は(物も人間も)汚い
 - いいヤツほど出世意欲を見せない
 - チャンスを掴むには悪知恵を使う
 - 出世を徹底的に追う奴は利己的と考えてよい
 - 優しくて好かれる人でも地位や名誉を得ることが出来る
-

[第二期: まんざら]

- 人生、失恋の数で優しさがわかる
 - 惚れやすい奴はお人好し
 - 恋は直感、愛は本能
 - 好きと思えば、行きなさい
 - 迷ったら、グレーはやめて白黒で
 - 澄ましていてもムツツリな人が多い
 - みんなムツツリだと思え
 - ほんとうは1度くらいは道を外したという奴は割りと多い
 - 好きになるなら普通にエロい人を選べ
 - エロい奴は割とストレート
 - エロに溺れてはいけない
 - 好きになる子はたいてい理想じゃない子だった
 - 可愛く見えたら、自分のエロボケを疑え
-

[第三期: 省みる]

- 子どもは3人以上できて一人前
 - 子どもが出来るころから自分も社会参加を果たす
 - 親バカ爺バカになって自分を省みる
 - だいたい反省したころは手遅れ
 - 手遅れになってからが力量の見せ場
-

[第四期: 出直す]

- 義理を尽くすことは人間として一番大事
- 義理を果たしなさい、道が見える

- 見えないところでお世話になった人に礼を尽くす
 - 礼を尽くすのに手遅れはない
 - 社会に恩返しをしなさい
 - 尊敬する人がいますか
 - 心に鬼を持ちなさい
 - 鬼のような助言をする先輩がいますか
 - 親友には大金を貸して欲しいと言いつせない
 - 困ったときは一人だ
 - 泣きたいときも頼る人はいない
 - 親友と思える人があつたら疑つても良い
 - 死ぬときは自分をすべて捨てておくこと
-

次々と思いつくままに書きなぐつた。

そこには、自分でも纏められない人生模様がある。

進化するのは、人として授かつた命と使命だ。

駅前路上シンガーたちも進化しなくてはならないことを前に書いた。

いつまでもそこで歌っているのでは進歩がない。

私もどこかでお役に立たなくてはならない、と思うことの多い日々。

2013年10月11日（金曜日）【[随想帖 II](#)】

手掛かりはあなたの残したペンネーム

随分と寒くなってきた感じがする。北海道の中山峠で初冠雪のニュースも読んだ。

夏布団のままだと朝方寒い。新聞屋さんが来る5時過ぎに目が覚めて、そのまま布団の中で膝を抱いていた。

きょうから上着を着てゆく。

少し駆け足でも汗をかかないのでありがたい。

▼待ち合わせ貴方の街は黒い雲

▼手掛かりはあなたの残したペンネーム

▼つぶやきのあなたの名前そっと消す

1週間前に柳壇に投稿してみたが、没だったのでここに書いておこう。

没作品に面白いものはないが、言葉を足せば何かが見つかるかもしれない。

私はこの3つの作品を書きながら、ささやかなるドラマを書きたいと思っていたはずだった。時間が過ぎると忘れてしまうからアカン。



2013年10月17日（木曜日）【[随想帖 II](#)】

秋仕舞

▼里芋の皮を剥いている丸い背中

13日(誕生日)は日曜日、京都に行く予定だったので、その前に家を訪ねたら母が裏で里芋の皮を剥いていた。



笹に山盛りの芋を菜刀で剥いていたのを見て、子どものころ、裏の小川に晒して自動で皮を剥く水車のような道具があったのを思い出す。

あれは一般的なものだったのだろうか。そんな話を母としている。

菜刀で剥くので角がゴツゴツしている。もう歳なので、面倒くさいし、手先も器用には動かない。

▼日の暮れに鎌洗いたる秋仕舞い

サトイモを洗う姿を見て、さらに、父が鎌や鍬を溝(を流れる水)で洗っていたのを思い出す。土のついた刃から泥を丁寧に洗い落としてゆく。

あのころは、家の軒先を流れる川にも豊かで綺麗な水がいつも流れていた。農地が区画整理されて、水路が農業土木技術の論理通りに作り替えられてしまうことで、庶民と小川との暮らしの姿も変わっていった。

何事においても、ヒトの知恵や工夫が染み込んだものが姿を消し、合理性を求めた近代化のモノが当たり前になってしまった。豊かになったような錯覚である。

▼柿すだれ父が呟く声がする

柿を簾のように縁側にかけている家も見かけなくなった。里芋の皮を剥く母のうしろ姿を見ながら、柿の皮むきもこのようにコツコツとこなしていたのだろう、と思う。

菜刀の切れ味が悪いときは父が砥いでくれたのだろう。何しろ名人級の腕前であったのだから。近所の包丁も頼まれてよく砥いであげていたのを思い出す。

コツコツ仕事をするときに息子を横に座らせて、小言でもなく、人生哲学でもない、愚痴でもないことを静かに話しながら、作業をした父を思い出す。

作業とは、つまり、包丁を磨ぐことや柿の皮を剥くこと、道具を片付けること、縄をなうこと、注連縄を作ることなど、様々な農家の営みや暮らしの中にあることである。

ネットを探してみたら懐かしい写真があったのでお借りしてきた。



2013年10月20日 (日曜日) [【随想帖 II】](#)

侘しいと書いたあなたを好きになる

▼侘しいと書いたあなたを好きになる

学生時代の下宿は侘しかったけど夢があったな。
いつか大物になって、社会を動かしたいな、なんてことを考えていた。
怖いもの知らずと言えるのかもしれないけど、勇敢だったとも言える。

◎

自分史。

短歌って欲張りですね。

自分史、綴る、躓く、眠れぬ、夜、雨音、激しい、
ってこんなにたくさんの魅惑的な言葉をいっぺんに使って作品にしてしまう。

◎

▼自分史を書き始めた窓の外

▼ペンを置く音重なって雨音

▼躓いたおかげで波乱と幸せと

まあ、私ならそんな日記にして、誰が読んでもわからないもので纏めてしまう。

30年(生きてないと思うが)たって読んだときに、なるほどと思えば万歳で、何だったかなと思い出せなければリセットして、新しい物語を書き始めよう。

◎◎

◎◎

(砂女) 自分史を綴れば躓く場所ありて眠れぬ夜は雨音激し

たぶん私より何年か先を走っている方と思う。お子様の話をなさらないので、子どもがなかったのか、事情があって(今は)いないのか。

もしも、子どもの話をなさったならば、凡人だったか偉大だったか、巨人だったか、それはもしもの話だ。

もしも……の連続だから人生は楽しいし、侘しい。

2013年10月22日(火曜日)【随想帖 II】



【号外】

先日お知らせしましたように、携帯電話(iPhone)が床に屈んだときに胸のポケットからポタリと床に落ちましてコロコロと跳ねたあとスイッチに反応しなくなりました。そろそろ、携帯をやめようかな~と思って、12月11日から1ヶ月間のうちに解約しようとはぼ決めていただけに、世の中、こんなもんやなと思った次第です。(……と、ここまでは[あっちのブログ](#)に書きました。)

さて続きを書きます。

ずっと写真を載せることに抵抗をしていた時期がある。ブログが映像に引きつられて、本文が疎かになると考えたからだ。それでも、載せていた一時期があったが、iPhone(ケータイ)をやめる事になって、再び昔に戻ろうとしている。

世の中の主流がラジオではなくテレビに移行し、ニュースや娯楽さえも、新聞や雑誌から奪って行ってしまふ。すっからかんという訳ではないが、活字だけで人々の心に物を届けようとするメディアやツールは、一種の時代遅れとまで(間違っ)思われてきた。

電源を入れればすぐ届いてきて、わからないことがあれば瞬時に調べ上げるネットワークに乗った情報も大切であるが、わたしたちの感覚であるとか、人間の生物たる受容能力に対して、技術が時間を縮めることは出来ない。もうこのへんで馬鹿げた遊びはやめに、損得ではないモノへと視点を移してもいいのではないか。

そう言い続けながら、iPhoneを4年間使用した。電話は掛けなかったの、5700円×48ヶ月=11万5200円を投じて少し遊ばせてもらったが、あと1ヶ月と12日を残して落下破損となったため、このまま終わらせることにした。

破損の報告は最近連絡を交わした二三人だけにした。あいつ、メールを出しても返事をよこさないなあ、電源が入っていませんのメッセージが続いたな、と気付いてくれる人もあるだろう。なかには、もしかして逝ってしまったか……と思ってくれる人もあるかもしれない。そう思われたら嬉しい。わたしもそここの人物だったといえよう。

連絡を交わした人たちとは電話番号(家電)ではなく、住所を新しく伝え合った。手紙を書いて連絡をしましょうという暗黙が了解された。どうしても必要な人は職場に連絡をくれればよいし、さらに急用なれば家族のケータイを鳴らしてくれば事が済む。それ以外のところにわたしが居たとしてもそれは電話に出られない場所が多い。

そう思って見直すと、生活行動パターンを何色かで色分けできてしまい、些かそんな人生を寂しいと思い、しかしながら、さて、わたしはその中の何色であるの人生を生きようか、と考えることもできた。

◎

十月はわたしの誕生月であることもあって、この季節はわたしの大好きな季節です。短い秋を、その短さ故に寂しがる人があるもの、めぐる季節は三角関数のようなものだから、また、新しい物語を伴って巡ってくるだろうと楽しみにしてみたり、枯れゆく落ち葉を美しいエンディングと考えてみたり、いや、あるいは新しい物語の始まりと見てみたりしております。

◎

向田邦子を読んでいます。飛び切り古いものを買ってきました。飛行機事故で亡くなられたのが1981年8月22日です、その2年余りあとに文庫化された「夜中の薔薇」という作品です。

向田さんは昭和4年生れでわたしの父や母と2歳違いです。それだけに、記述の内容の隅々までが、父や母の、特に母の呟きやボヤキ、ため息と共振していて、わたしに迫るものがあります。

エッセイは、20歳代から50歳に至るまであらゆる日常のことに触れていて、30年前にわたしを育ててくれた父母や身近な人たちに時代を飛び越して会いに行っている感覚をもらえます。

自分ではだんごっ鼻で可愛くなかったと繰り返し書いているのですが、70年代に彼女の作品に直面していたわたしは、向田さんの写真を見てお気に入りだったし、エッセイを今読んでも、その意地の強さや頑固さやお茶目さがなかなか素敵で、ヒトの味わいのようなものを愉ませてもらっています。(感想は後日、いつものところで)

[ケータイを置いて読書の十月尽](#)

[わはくま \(@wahaku\)](#)

[October 31, 2013](#)



[wahaku](#)

2013年10月31日 (木曜日) [【随想帖 II】](#)

君住む街

[Y子さん](#)に手紙を書いたことがあった。

◎◎

◎◎

あの子今ごろどこで何をしているのだろう。数年前、近所の大型ショッピングセンターでばったりであった時には結婚したと
いていた。よかった、よかった、幸せの一步を踏み出せたのだね、と一緒にあって喜んだのだった。

何故、あの店で偶然に会えたのだろう。普通なら会わないようなところに住んでいるのに。神様のおかげなのかね。

いろんな事件に巻き込まれ、幸せとはいえないような人生へと急展開していく少し前に私たちは知り合いになれたのでし
た。今、その子の住む街はちょっと離れた半島の向こうの小さな市。きっと幸せに暮らしているだろうと思います。

前略、Y子さん。来ましたね。今年も寒波が。

2013年11月16日（土曜日）【[随想帖 II](#)】

火吹竹

火吹竹がテーマになって、ふと思うこと。

おどさんを臉に浮かべている人も多そうで、とても懐かしい風景が蘇ります。

冬の竈。そのねきでのてったいは、ぬくかった。

外でする薪割りよりも楽やった思い出が多いです。

(11月16日)

2013年11月17日(日曜日) [【随想帖 II】](#)

前略。失敗作のこと

一日じゅう家に居て、誰とも喋らずに日向に腰掛けていると、風邪は、何ともありません。しかし、仕事に出掛けて、電話に出て声を出すと急に煙の中にいるように咳が出ます。

身体は楽ですし夜もよう眠れます。もうひと頑張りかなと思っております。

◎◎

昔に読んだ古い名作を二冊ほど本棚から出して来て、並行にパラパラと読んでいます。[島尾敏雄「死の棘」](#)と[遠藤周作「悲しみの歌」](#)です。

どちらも、大学生時代に、寒い四畳半で、勉強から逃げ回りながらこのような作品に没頭していたのでした。私にもう少しの才能があったら、また違った道を歩もうとしたことも考えられますが、島田君が早稲田の文学部にどっぷりと浸りきっているのを微かに見ながら私は現実的に理工学の道を行くのだと確信めいたことを決めてしまった。

心のおおかた80%ほどを文学に奪われながらも、もしもあのときにあの道を歩んだら、僕は今ごろ途轍もない詰まらない人間になり、どうしようもない道を歩んでいただろうと思う。

しかし、だからといって、理工学の道を選び、世間でいう一流大企業に二十余年間勤めても、人間の本質という面で私は変化することが出来ずに来てしまった。

運命なんてのは、自分の描いた数々の物語のうちの失敗作の1つに落ち着くのかもしれない。私はそれで幸せだと思っているが、周囲がそれを許さなかった。



拡大([左](#)/[右](#))

2013年12月 4日 (水曜日) [【随想帖 II】](#)

飲まない人

高村 砂名さんがご自身のブログ(sitoo)で「飲まない人達。」というタイトルの日記を書いて、お酒を飲まない側の人たちが織りなす面白い対話を紹介している。

とかくお酒は悪者であることが多いことを考えながら拝読すると、左党には些か辛口なお話にも思えてくるし、取り留めのないギャップのようなものを感じる。

私のツマは「飲まない人」で「暗い人」だったが、久しぶりでの同窓会で大勢の友達を驚かせたという。つまり、見違えるほどの変貌を遂げ、この二つの性格を逆転させてしまった……、いや逆転させているかのように振る舞えるようになり、実際にそんな暮らしをしながら生きている人となってしまったのです。そしてその立役者が私だったということで、そのとどの詰まりが私の酒好きが功を奏したのではないかと、ふと思いながら、それとは全く違う砂名さんのような家族もあるのだな、と。

まあ月並みな感想ですが、いろいろ考えてみたりしました。

ツマは好きな人に(←わたしのこと)おいしいお酒を飲ませてあげたいと色々考えたのでしょう。ブランド物や貴金属のようなもの金額の張るようなもの、さらに格好いい装いなどにも興味を示さない私にとって、おいしいお酒を飲ませることは、ひとつの楽しみだったのではないのでしょうか。

お酒にはやけ酒という形容があったり、酒癖が悪いとか、乱暴な酒の例えもありますし、苦しさ紛らす酒なども演歌に登場します。

しかし私は、そんなお酒は一切飲まないのです。お酒は機嫌のいい時しか飲まないし、そんな時しか飲みたくならないように心がけています(まあそのような性格なんです)ので、常においしいお酒やおいしい飲み方、おいしいおつまみ、楽しい会話がなければお酒が出てきてはいけない雰囲気です。では悲しい時や怒っているときはどうするのかって……じっとしているんですが。(まあ、あんまし機嫌が悪くない人ですけど、ふだんから)

お酒ってのは、ナマモノですし、旬モノでもある。媚薬とも言われるし麻薬のようにも扱われる。しかし、品位のある高級な飲み物です。ちょっとした心づかいでとてもおいしくなります。その熟成過程をのウンチクに耳を傾けてみれば歴然としますが、それは置いて、お料理をする人が高級食材を粗末にしないのと同じように、お酒も一滴一滴ころをこめて扱ってこそおいしくいただけます。

まったくお酒を飲まない知人が極上の一品料理を出してくれる居酒屋をしていました。心が分かるらしいです。おいしく飲んでもらえるように、必死になって工夫をするのです。

飲まない人であるからこそ出来るような、そして、お酒好きの左党のみなさんを喜ばせるような粋な計らいをなさってみてはいかがかなと思いました。

中には一緒に飲んで欲しいという方もありまじょうが、私はそばに居てニコニコと相槌打って一緒に居ることを喜んでくれる人がいれば、それで十分です。

粋な計らいを味わえるような左党になりたいものです。

おうちを居酒屋にしよう！

「飲めない」というご縁。

砂名さんがコメントを下さって。どうもありがとう。

無理やり押し付けたのではないかと気にもかけているが、人は現実社会ではなかなか会えないのでブログのような仮想空間で交流をしようと編み出されたのだろうから、大いにプラス面を活用して談話をしましょう。そして視野を広げるのに役立てて(マイナス面はマイナスとして学んで)いけば、新しい自分になれると、そういうことにしておく。

◎

「きょうの料理」について首記のリンクで触れているので、またまたお料理の話であると食いしん坊の虫が収まらない。

料理には、「調理法やその理由、料理家さんがポロっと仰る食文化」があることを感じ取り書き留めているという。これは、とてもいいことですな。

教えてもらうことだけではなく、そこから刺激を受けて新たな想像力を活かしてください。

単に食べるだけではなく、農耕、漁業の歴史ある人々の暮らしに目を向けて、季節も考えて、その時代の生活実態も考証して、食べ物を考えることは、食だけではなく暮らしなどにも及んで広い洞察力のバックボーンが身につくと思います。

◎

オトコの料理、って言葉があります。あれは二つの特徴を持っていますね。

ひとつは、ウンチク。漢字書き取りテストにも出題される「蕪蓄」です。大根はどうして米のとぎ汁で下茹ですると美味しくなるのか。ぶりは臭みを取るために冷水でよく洗って血身をとる、私の場合、その後、お湯をサッと通して、再び冷水にさらしていますが、何故そうすると美味しくなるか。なんてのをダラダラと喋りながら、お酒を飲む。お酒を飲むときに蕪蓄を聞かされる側に回った方は、負けずに次回何かで応酬しますか。



もうひとつは、製法に凝る。昔、煮豚にチャレンジしたのですが、けっこう旨かった。二度目に作ったら、そうでもなかった。もっとおいしく作りたいと何度もチャレンジするものの、再現性を得るにはかなりの回数の煮豚を作ることになります。焼き鳥でも同じでして、少しでも飲兵衛がおいしく食べる焼き鳥を目指すのです。贅沢な焼き鳥になってきますが、原材料費が、焼き鳥屋の値段を超えてるほどの凝りようで、ボリュームも満点に成っている。年に何度かしか作らないが、けっこう定評があります。



ぜひ、飲兵衛さんを驚かせてやってください。こういう素朴な酒肴が嬉しいものです。

2013年12月21日（土曜日）【[随想帖 II](#)】

あと二枚染み染みとつける日記かな

いよいよあと二日を残して、平成二十五年も終わろうとしています。
みなさま、いかがな年の瀬をお過ごしになっておいででしょうか。



昨今、区切りのない暮らしが一般化し、そのような考え方に支障もなく、また合理性もあることから、大晦日に最後の節を越えるという意識は確実に形骸化されつつあります。

そんななかでひとり、そういう一団から抜け出て、師走から正月にかけて、今年一年をしっかりと振り返り、さらには生涯のあれこれも整理してゆく準備に取り掛かろうとしております。思うに、呼吸の折り合えし点のような、あるは満潮が引き潮に変化する時のような静かさを味わおうとしています。

◎◎

昭和三十二年から平成十年を引き算することは、西暦で表してないためそのままでは不可能です。平成十年から平成二十五年は簡単に引き算ができます。

これでいいのだ。これがいいのだ。

ヒトにはこういう非合理性が必要なのだと思います。

十二年という干支の周期、十年という十干、一年を二十四回に区切る節気、そして一年を四つに色分けする季節、それに月の満ち欠けを混ぜあわせた時間の流れで暮らす。

そういうところに、少しずつ戻っていこうとする心。
そして自分。

寒さいっそう厳しくなりて候

[雨降茫茫日々記 1078](#)から

砂女さんの正体は不明なまま。
それでいいのだと思うことにした

作品に弱さがない。
しかしながら、男気が強いかというところでもなさそうだ。不思議をいっぱいしておく。

さて、

- 今日もまたたましひ濡らし冬の雨
- 剃り残る髭さぐる指暮れやすし
- ポンポンがくつつ笑ふ冬帽子
- 山国は冬に至れり水に傷
- 底冷の底で抱きあふ蝦蟇二匹
- 残り湯に膨れ傲岸さうな柚子

12月25日のページのもので、冬至のゆずのころの作品がある。

私は文芸人でもなく文学とも無縁であるがゆえに、[このページ](#)のポンポンのつけた帽子を気に入っている。

「たましひ濡らし冬の雨」であるとか、「剃り残る髭さぐる指」、「くつつ笑ふ」、「抱きあふ蝦蟇」というところに、この人の視点があるのだ。しかしそれを横取りして、私なりのドラマが生まれ、そのドラマは生まれてのち成熟する妄想のような形で変化をする。

まこと、俳句というのは、私にとって都合で勝手気ままに時空を飛び跳ねてゆく。

砂女さんは、ゆずが「傲岸」という。私は、ゆず湯につかっているし、「傲岸」さや、あくる日に落ちぶれて情けない姿になり臭気を漂わせていても、やはりそれは私にとってドラマでしか無い。

◎

大学時代、母が編んだ毛糸の帽子を冬の間じゅう冠っていた。それにはポンポンがついていた。肩まで伸びている長髪が突然朝になって跳ねてしまってもその毛糸の帽子は私の髪を優しくつつんだ。

何度も繰り返し読みながら、カエルは本当に「抱きあ」っていたのだろうか。
冬が寒くなればなるほどに、抱き合うぬくもりが恋しい。

男気が少しあらわれている。

インクも枯れて

寒中お見舞い申し上げます。

年末年始はグウタラをしてしまい、年賀も参賀も疎かにしてしまいました。

元気においでと思いますが、年頭の挨拶だけでは、いわゆる世間話もできないので、子どもは大きくなったのかとか進学したのかなどというサラリとしたことやありきたりな話もおざなりのままになりがちです。

月日が過ぎると家族とそれなりに幸せに暮らし、孫ができるとその子たちを大事にして日々を送る人が多くなります。そんな折にひょいと思ひ出して貰えたら、やはりメールではなく、手紙を書いてみたいと思うのです。

万年筆を使う頻度が減ってしまい、インクが切れてしまうことが無くなっています。

枯れることはあるのですが……、と笑ってみたりしております。



2014年1月21日 (火曜日) [【随想帖 II】](#)

寒月

気まぐれに砂女さんをよむ。

寒月の足が覚えてゐる坂道 砂女(1096)

大寒のときの月が何かを蘇らせたのだろう。思い出したくないこともあれば、ふたたび再現したいことだってあろう。忘れていたことが期待はずれに呼び戻ってきて心はときめき、あるいは沈むこともある。

私など狭苦しい世界で生きているニンゲンは、忌々しことばかりに泣き笑いをし、世の中の悪が素早く滅びればいいと思うものの、しかしながら、それには痛みと犠牲を伴うことが世の常で、それでもと強くは言い難い面もあり、怖気づいて居るだけである。

+

砂女さんがブログに書いている博物館は、正しくは「民族学博物館」。私が東京を棄てて(諦めて)京都の才社に就職を決意をした動機が、京都大学の偉い先生方の書物の影響で、今西先生とか梅棹先生とか、そういう方々の熱のある報告や書籍を読んでいると、居ても立ってもいられないと感じたからでした。何ができるわけでもないのですが、とにかく京都に行こうと考えて会社を選んだことを思い出させてくれるのが、この民族学博物館です。京都に住んでいた10年足らずの間にはせっせと通いました。

民族学博物館にひとたび足を踏み込めば、ニンゲンの純粹なる姿が手に取るように見えてくるような気がするのです。現代文明がアホで愚かなものにまで感じられて、限りなく原始人に近いような暮らしで、真剣に祀りに打ち込んで、神とともに生きていく人生であれば、これほどまでに欲に満ちた日常などなかったのにとさえ思えます。なんどでも行きたくなるたった一つの場所かもしれない。

+

さて砂女さんのお月様。

そこには坂道があって、何かの用事で先を急いでいたのか、用事を済ませて逃げるように帰り道を急いでいたのか。(悪いことも良いこともみんな)「お天道さまが……」(ご覧になっている)というようなことを言いますけれど、そこには、静かでニコリともしないお月様がいたのでしょうか。

月はどこまで行っても無言で、昨日ポロリとついてしまった嘘や見栄も、お見通しのようなところがあって、俳句でそっと懺悔している。(それは私の場合ですけど。)

ひとりで見上げる月であるから、徹底的にひとりになれる。ヒトは自分に嘘は付けないのだから、時にそういう自分に成り戻りたいという願望もあるのでしょうか。

あの晩に月が照らしたあの人の赤いマフラーはモノクロに見えたのに、記憶が舞い戻って来たときには真っ赤になっている。そこだけ赤く、それが辛い。

ヒトの脳みそってのは勝手なものだどつくづく思う。

肉じゃが



肉じゃがにするとツマが言うので
ゆで卵を入れてみようかと提案した。
普段通りで気づかないのだけれど

ゆで卵がそっと静かに
糸こんにゃくの後ろに
隠れている。

プリン・ア・ラ・モード — 春限定

(29日)

図書館に行った帰りに
ふらりと、しまむらに立ち寄って
隣のシャトレーゼで。
春限定。



この写真を友だちにLINEで送ったら
その人も同じ日にこのプリンに出会ったのだという。

おとうさん(ご主人)が仕事の帰りに買ってきてくれたのだというのだ。
我が家は夫婦で立ち寄ったのだが、お互いに細やかで平和な暮らしやなと思いあったのだった。

2014年1月30日(木曜日) [【随想帖 II】](#)

傘差せばスターになれそうに二月始まる

たった一日二日少ないだけでとても短いような気持ちになってくる二月であるが、そういうところに奥ゆかしさや寂しさのようなものを感じてしまい、まだ寒のさなか、風も冷たいにも関わらず憎めないのである。

だが、三日四日と数えれば立春になる。春になったら新しい自分に心を塗り替えてもっと澆漉にありたいものだと願う。

御機嫌がいいからといって昔のように多めの晩酌をすることもなくなって、もう一杯呑みたいと思うところに旨さありと自分に言い聞かせている。言い聞かせながらそのころのように反発心も湧かず、自分で自分のその上手さに拍手を送っている。

そうこうしている間に二月一日も終わってしまい、二日の朝は夕べから雨が降り出して、夜明けのころはけっこうな本降りだった。雨といっても氷雨のようなこともあれば、冬であることを忘れさせてくれそうな雨のこともあって、三寒四温の中に交互にこの冷たい雨と優しい雨が混じっている。

今朝の雨は、優しい方の雨であった。咲き始めた梅のつぼみを穿って飛び回っていたメジロたちもきょうはどこかで雨宿りをしていることだろう。

休みであれば、雨降りにツマが仕事に出かけるときに必ず車で送る。

庭に置いてある車まで玄関からひとつ走りなので、よほどの雨でない限りは傘をさしては行かない。きょうもいつものように小走りにドアの前まで走ったのだが、冷たくない雨のしずくをかぶりながら、もしかしたら傘をさして背筋を伸ばして玄関からピョンピョンと庭石の上を跳ねてみたらスターに気分になれるかも、などと考えた。

▼ 傘差せばスターになれそうに二月始まる ねこ

そんな阿呆なことを思い浮かべてしまうような御機嫌な雨降りの朝だった。



(写真: ムスメの卒業式のころに北野天満宮にて)

から井戸

から井戸へ飛そこなひし蛙かな 上島鬼貫

寒さは一番厳しくはあるものの確実に春の手応えのようなものを感じる。そう思わせるのは太陽の光の逞しさであろうか。

「古池や蛙飛びこむ水の音」というおそらくすべての人々が知っているのではないかという芭蕉の俳句が、読者に強烈に余韻として投げかけた「音」というものを私は想像していた。

+

音として響かない音と逞しい光が、春にはあるのではないか。そんなぼわ~としたことを日向ぼっこの陽だまりで考えているときに、鬼貫の俳句が記憶から蘇った。

ここには音はないのだが、耳を澄ませば聞こえる。

井戸は「から」でなくてはならない。

2014年2月11日（火曜日）[【随想帖 II】](#)

わが家の猫は三匹です

砂女さんのすごさは私にはわからないのだが、(わかっているように)見栄を張っても仕方ないといことは長く人生をやっているとわかるので、お好きな二句で思うところを書き残しておこう。

ちょっとお題を頂戴しただけなのでコッソリといく。

たんぽぽよあたしの猫がいた時間 砂女(1117)

前髪をぱつんと剪つて春兆す 砂女(1121)

◎

[雨降茫々日々記](#)には写真もあって、さすがと思わせるような視点が散りばめられている。

パソコンで日記を書き始めたころに、同時にメディアにはデジカメが普及し始めて、ブログを書きながら日々写真を載せる人、旅先の様子を載せる人などがあつという間に溢れた。

カメラを持たない私は僻み根性・捻くれ魂で文章だけの日記を書き続けた。四国を旅しても陸奥を旅しても写真の混じった日記は稀である。

私には言い分があつて、ひとたび画像が載ってしまうと、作文が読まれなくなるので、言葉を伝えたい私は画像を載せないことを主張した。それが成功だったかどうかは分からないが、ブログの中に残った長編のシリーズは、言葉だけで綴っている。

友だちになった人であってもなかなかブログの奥のほうまでは読んでくれないのだが、それは一種の鍵のようなもので、そこをぐり抜けてくれれば私自身に到達できる。そんな洒落たことを言つてはみたものの、私が死んだときにムスメでさえもこれを読んでくれまい、と想像する日々である。

口ぐせは、それでいいのだ。やけっぱちで、そうなってくる。

◎

さて、砂女さんが私にヒントをくれた「猫がいた時間」について回想している。

私には猫などいなかった。ホンモノの猫は子どものころに飼ったことがある。犬もいたし、ヤギも、牛も、ニワトリもいました。

今、私は猫という架空の幸せを思い出している。幸せは論理的に不幸せと背中合わせであり、人生であつと驚いた一瞬は何ですか?という巷に転がっていた質問を自分なりに考えたときに、あつと驚いたくせにすぐに思い浮かばず、あとからじわりと襲ってきた不幸せな出来事があつた。ツマが薬を飲んで救急車が来て眠っていた私が救急隊員に叩き起こされてツマは病院に運ばれて……というあの事件だ。(もちろん、ブログに何度も書いてしまう卒業できない学生だった日々も強烈な記録ではあるが)

ツマに一番大きな事件は何だった?と尋ねたら、「オンナをつくったときや」と間を置かずに答えたから、同じ答えを思い浮かばなかった私は黙ってしまった。

不幸せを幸せに変えることができ、今は大きな傷は残っているのかもしれないものの、猫のような二人がお互いに猫であることを否定しながら暮らしてる。

▼たんぽぽよ私が猫といる時間

私にはこんなふうになってしまう。

◎

ぱつんと剪つて。

私は、そんなわけで「ぱつん」と音をたてて切ってしまう必要があつたのだ。音が大事なんだと思う。古池に飛び込んだ蛙

のように大きな音をたてて冬から春へと切り替える必要があった。

▼おちんちん危うくぱつんと切られんや

猫を飼いたいと何度も、それとなく話題にするのですが、頑固に拒否され続けております。しかし、うちにはもう一匹大きな猫がおりまして、たぶんそのうちお嫁に行くと思いますが、この家に住み続けるとも自ら申しております。

もしも、猫を飼うならばこんな名前にしよう……と、そういう夢ばかりを浮かべて暮らす日々です。



2014年3月 7日 (金曜日) [【随想帖 II】](#)

朝ドラ

▼3月11日の通勤列車のぼんやりの中で、NHK朝ドラのことを思い出している。父のことだが、メモは「そういえば」で始まっていた。

▼そういえば、テレビを見ている姿など見かけたことのない父であったが、朝ドラを見てから、または昼休みに飯に帰ってきたついでにドラマを見てから、再び職場に戻っていく姿を見かけたことがあった。

▼私が家でゴロゴロしていた頃のことだから、それは学生時代のことで、春休みとか夏休みであったのかもしれない。父は40歳半ばだったことになろうか。

▼父はテレビを見ない人ではなく、ひとりでドラマを見ることもあったのだなと今頃になってふと思い出した。

▼日曜美術館を見ている姿と、朝ドラを見る姿。父とテレビとが結びつく僅かな思い出である。

◎追記

▼居間で、母と弟と私と三人がテレビを見ているときに、例えば冬ならば一緒に炬燵に入りミカンなどを食べながらドラマをみたような記憶はない。8時だよ全員集合をみたような覚えもない。

▼子どものころに夢をみたように「一緒にお酒を」飲んだような記憶もない。

▼だからといって、私の子どもに父とそういう時間を作って思い出の足しにしなさい、と言うこともしないでおく。背中を見せてればいいのかと、近頃はそう考えている。

2014年3月13日（木曜日）【[随想帖 II](#)】

ごちそう

3月14日はツマの母の命日である。中3の卒業式の数日前に緊急手術をするといって京大病院に入院し、卒業式の前日に逝ってしまう。ツマの母はそこで止まったままだ。結婚したころは、思い出してはそれからしばらくは泣いてばかりいたが、16日に30回目の結婚記念日を迎える今では、もう泣いてもいられない。それでも、もう一回逢いたいなあとひとりごとを言っているのを聞くと、居た堪れなくなる。

中旬になって少し暖かい日が続いている。勤行をする部屋にも電気ストーブを持ち込まなくても良くなった。日一日と春になっていくのだろうか。そんなことを思いながら、16日の結婚記念日には何を食べようかな、などと考えている。ムスメは社交的で、毎日友人知人と食事をして帰ってくるが多くなったし、二人の食卓を何で飾ろうか。地味な食事になると思うが。

◎

さて、ごちそうを食べたいな、と考えて子供の頃の食卓(飯台)を思い出してみた。

今日はごちそうを食べる日やなと察していると、母が家で一番大きな皿を持たせてくれて、魚屋さんでお刺身を買ってきてと言う。風呂敷に包んで皿を抱かえて店にいき、お刺身をおじさんをお願いすると綺麗に盛りつけてくれる。

一番大きな皿といっても、大人になった今に思い出すと、手のひらを広げたほどのもので、町の食堂でコロッケ定食を食べたときにキャベツとコロッケが載っている大きさの皿だったのではないかな。あれが我家で一番大きな皿だったのだ。

お刺身の値段が幾らだったかとかどれほどの量を(何グラムほど)買ったのかとかの記憶はない。買う母の方も家族で食べるので、というように私が言伝を受けたと思う。

流通システムが変化し、経済感覚も生活スタイルも大きく違った50年ほど昔、つまり、刺し身は、年に何度かのおめでたいときの「ごちそう」だったのだ。

今は一日一魚ということで、スーパーに並ぶお魚を買う折に、三日に一回くらいで刺し身が入る。私がツマと一緒に店に出かけると必ず刺し身を買うし、県内産で珍しい魚であったりすると迷わず買う。(珍しいといっても変わった魚ではなく、なかなか出回ってこない魚という意味です)

◎

他に、子どものころのごちそうの定番は、寿司、すき焼きだろうか。

寿司は、スーパーで身近に買えるようになってしまった。すき焼きは、ごちそうジャンルから少し影を潜めて焼き肉などにどちらの家庭も変わりつつあろうか。

鍋といえば、水炊きかすき焼きをした。田舎の私にとっては、めでたいことがあって鶏を料ったときに水炊きをするか、牛肉を買いに行つてすき焼きになるか、母が手間をかけて寿司を作ってくれるのがごちそうであった。そうそう、味ご飯をたいてくれることもあった。

というわけであるが、現代はごちそう文化、よそ行き文化というものが消えてしまったこともあって、毎日のごちそうのおうちも多いかもしれない。(毎日がよそ行きの服で過ごす人も多いでしょう)

結婚記念日。16日。

何か旨いものを食べたいなあと思うのだが、何にしようかしら。

そうそう、16日は冷蔵庫が届くのだ。505リットルのを買ったんですよ。

実質二人なのに……。

咎めるのは誰の役目か

世の中が自分を中心にして見渡せるように(ツイッターも)なっていますから、使いながら世間のみんなはこんなふうに社会を見ているのだと感じます。

ある1人の人のつぶやきにむけて私は上記のようなことをリプライした。ツイッターのアプリケーションがその人にとって使いづらいものに微小変更されていたことで悪さを嘆くつぶやきであった。(7月26日)

ネットワークが繋がることで見かけ上はフラットに社会が連結できるようになり、情報はリアルタイムで流れ込む。また、発信できる快適なインフラのうえで便利になったように見えたのであるが、そんななかで、しかしながら、自分の存在を相当に強い力でアピールする必要性が出てきた。

テレビ・メディアは公共放送でさえ自社の番組を宣伝することに余念がなく、全く独立した他の番組の時間枠を食いつぶしてまで視聴率という数字を獲得するために「番宣」をする。このことを悪だと決めてかかっているものはいけないものの、番組愛好者には無関係の番組情報は甚だ迷惑であり、ましてお金を払っているならば返品して欲しいほど無駄なことも多い。(ここでテレビを切るかチャンネルを変更するのでその後のことはわからない)

新しいものをPRするという時代が変わっているのである。ホームページであっても、ほんの数年前ほど昔の時代は、自らのPRにさほど熱心ではなくせいぜい検索にヒットしてくれればあとは口コミで(または噂で)広まってくれて上々な評判を得てゆくというスローな進行であった。しかし、今の時代のスタイルとしては、構成を時系列的にして、ブログ形式で発信をするものが増えたこともあって、それらで提供する情報群の価値には新しさという尺度が前面に出て、古いタイムスタンプが付いた情報は検索でヒットさせて活用するものではなく、必然的に保管さえもされなくなりつつある。サムネイルや検索用テーブルなどが幽霊のように網の隙間に残り、情報が散らばった仮想空間はゴミだらけで無秩序状態になっている。

このことにも善悪などはない。そこまで口出しができないのがほんとうのところだろう。新しいことは良いことで、クイックにアクションを起こし、生きた情報を活用して次のステップに役立ててゆく。誰に聞いてもそう考える「時代」であろう。

さらに、これらの情報化された社会システムや秩序がもたらしたことで、言い逃してはならないことがある。それは、これらの情報を活用している一般人の質の低下だ。月並みなことばで言えば、アホもカシコも、当てにならん情報や食いつきやすい情報、マスコミ(とくに話題性を拾って流し続けるニュースやツイッターに似たような低レベル報道)に翻弄されて、情報をたっぷりと纏い強靱に武装し、ネットやSNSに群がっては自分の意見を主張する。アホであろうとカシコであろうと同じように意見を述べるのは良いとしても、分別を付ける能力を持たないジャンルの群衆がネット上でたためな思想やイデオロギーで暴走を始めるのが怖い。カネになる話題であれば報道までもが食いついているから、呆れてモノが言えない。

安倍総理や一部の政治人がどのような不安や不満を与えようが、それは国民が願ったことであり(私は投票をしていないが)、願われた人々であり、然るべき方々なので、お任せする覚悟(諦め)はしたのだが、それ以前に得体のしれない烏合の意見が結集してメディアと交じり合い金儲けをする集合とも絡み合い困った方向に迷走して行くとなると、一体この世の中を咎めるのは誰の役目なのだろうか。

自分は黙っているべき人間なのだとことをわきまえて欲しい、と思う。その一方で私自身の言い分でさえストレスの発言であるとも思う。



夢を追う

[砂女さんのブログ](#)から「[恐れることなく思い立つ](#)」

若いころは無鉄砲であったのか、まだ無垢であったのか。恐れることなく思い立ったら飛び出して行ったものです。

若いときにしかできないことなのだと思います。いつも年老うことを寂しく思っていたら、今どきの若者には、私の若いときのような行動を取る人が減少しているらしい。

お手本通りの筋書き通りになんでもやっしまえるチカラは素晴らしいけど、やってるその人たちに夢があるのだろうか。

でも天気予想だって、どこかの山深い峠の道順だって、調べてしまえばハッキリするから、そりゃ安全ですし順風満帆です。

どこまで考えて、ちかごろの僕が詰まらなくなったのは、夢を追いかけてきた自分を棄ててしまったからなのか、と気づく。

さて、[夢を探しに](#)。

そんな旅日記を書いたことがあったなあ。

2014年6月 3日（火曜日）[【随想帖 II】](#)

六月尽きる

あすから7月になります。

集団的自衛権の行使についての憲法解釈のニュースが連日賑わっている。真面目で真剣な人であればあるほど、国家の行政機関がこのような道を選ぼうとしていることに怒りを持つだろう。当然であり、人間的である。ヒトはそうでなければいけないし、絶対的姿として、そのような考えを持ってこそニンゲンであるといえる。

新聞は、一段と声を張り上げて、国民よそれでいいのか、と言う。今言わなくて誰がいつ言うのだ。

身近な井戸端会議でも、親しい人の集まるSNSでも、FACEBOOKでも、ふだん意見を通そうとしないような人までが、いよいよ声を張り上げねばならないと思い始めている。

そんなことがわかる六月下旬であった。



それでいいのか、オマエも反対しないのか、と問われたら、それでいいのだと答えることにしている。

だって、世の中自分のことしか考えないで、豊かさと幸せを自分の方向に向かって求め続けてきて、そのことに意見を言っても馬鹿じゃないのという視線で見返し続けてきた奴らが築き上げてきた政治なんですよ。

あれだけ、わたしは熱心に意見を言ってきたんだ、(変人扱いのように)嫌われても言ってきたのだから、もういいよん。みんな、好きにしてちょ。

わたしは、40年近く唯一参政できる選挙で、ただひたすらひとつの考えで一票を投じてきた。疑問を持った日もありながら、諦めの気持ちに襲われながらも、世の中を変えるのだと信じて投じてきたけど。

好きにしてくれ。おれは生きていだけで精一杯や。人生の非常停止ボタンなんていつでも押せる。

bike-tourist.air-nifty.com > Apple 散歩(写真日記)

2014年6月30日(月曜日)【[随想帖 II](#)】

それでいいのだ

7月2日、[Lisa さんがご自身のブログ](#)で、励まし合う人を死という形で失って、「病気になったら 恵のとき」(晴佐久昌英)という詩を書き添えて悲しい想いを綴っている。私はコメントを書けるほどの立派な見識を備えているわけでもなく、ただただ一緒に考えこむだけである。

● 悲しみの共感

残念なことに多くの人は、他人の悲しみや喜び、怒り、憎しみなどを本当に心から理解することなど、そう簡単にできないのではないと思う。もちろん、わかり合える人もあるし、心から通じるあえることを可能にする人もある。

でも、突き詰めて考えていけば、自分はひとりであり、誰のチカラも届かないところにポツンと置かれているのだ。孤独と寂寥に押しつぶされそうになって生きている。ひとりの人を自分の力ではどうしようにもできなかった悔しさと諦めと、怒りのようなものさえも湧いて、やがて静まってくると押しつぶされそうになってくる。

● 人生を振り返る

それは、順風満帆で健康なときであっても、あるいは、失意に満ちたどん底であっても、同じなのかもしれない。見栄を張って、自分の栄光を自慢しているときであっても、孤独は孤独である。だから、見栄や名誉やお金や地位など、あらゆる愚かなものに纏われて生きていても虚しいだけだと思った。そんな生き方はさぞや辛かろうにと思ってみたりして、輝かしかった過去をあっさり捨ててしまう決断をして、人生を諦めて自分の弱さを噛みしめて暮らしたときもあった。

まだまだ、生きるということを見渡せていないわたしと、それに立ち向かおうとするわたしが、頭の中で闘っていた。わたしは、死んでいたも同然だと自分で自分を哀れんでみたこともあったのだ。

● 人生の果てに

随分と無駄な時間を費やしたけど、棄ててしまった時間などは今更思えばカスの様なもので、やはり、生きていることに価値があった。死んでしまえば楽になれると勘違いをして一足先にその道を選んだ友や同志も居た。

人生のラストパートを走っている。確実にそう言える。しかし、わたしには、自信がない。本当の悲しみを共感する自信がないのだ。それは、私が未だに未熟だからだろうか。それとも、悲しむセンスを枯らしてしまったのだろうか。

● 真実の自分

生きることを諦めないで、いつまでも夢を捨てないで、一生懸命に生きてきた人の姿ほど美しいものはない。言葉にはできないほど、一瞬一瞬にまたたきがあるのだ。

だからこそ、そんな詩が生まれ、人を共感させ、新しい心を増殖させていくのだろうと思う。

「残念なことに」とはじめに書き出したけど、しかしながら、それはそれでいいのだとも思うことがある。それは神様の仕業で、わかってあげないようにできているのかもしれないと考えることもある。悲しんでいる人をわかってあげられない方が本当の自分なのではないか。ニンゲンってそんなものではないのか。偽りなく生きていれば、しかも1回だけ、真実の自分に会うことができるかもしれないのだ。

だから、その1回きりの悲しみをチャンスにして恩返しをしなくてはならないのかもしれない。

● 幸せと不幸せ

人は、地上にいる「いきもの」たちよりも、賢くて考えることができ、感情を持つこともできるし、優しくすることもできる。憎み合うことも殺し合うこともする。科学が進化して、命という運命の筋書きも書き直すことができるようになってきている。

なぜ、そんなことまでするのだろうかと考えたことがある。科学の力を使って、筋書きを変えてしまおうとか、幸せと不幸せを同時に生むことをやってみたり、危険と安全を詭弁に論じたりしている。

蝉は、一日でも長生きをしたいと考えることがあるのだろうか。トンボは外敵に襲われずに生き延びたいと思うのだろうか。では、人は幸せに暮らすことを生命体の本能として体内に刻み持っているのだろうか。

そんなことを考えているうちに、ニンゲンは、やっぱり賢いが故に、知能を働かせることができるが故に、とても寂しい思いをしたり、幸せの正反対であるような不幸せに対面しなくてはならなくなることもある。そのことが悔しいほどに愚かにも思える。

● それでいいのだ

だけど、ぐるぐると回って、結局は「それでいいのだ」となってしまう。無抵抗であり無能力でいいのだ。そう思ってしまう瞬間も出てくる。

いい機会に恵まれた。

こうして命というものと同じ向き合っただけの静かな時間を過ごすことは、途轍もなく掛け替えのないことだと本当に理解してれば、一生に一度だけの一瞬で、それがわかるならば、もうそれで十分だと思うようにしている。

だから、今度は恩返しをする番なのだ。

● 恩返し

前進する気力を喪失し自命を絶った人、気力が手に負えなくなった人、突然不可抗力の事故が襲いかかった人、立ち向かえない病魔に襲われた人。過去に出会ったその人たちは、親友であり家族であったりしたわけだが、その様々な生き様にじわりじわりと責められて、わたしはここまで生きてきた。

生きている人の使命は、一人でも多くの人に、自分が蓄えた生きる力を振る舞うことなのだろう。今はひたすら悲しんで、悲しみは背負って一歩一歩しっかり歩いて行こう。それでいいのだ。そう思う。

2014年7月 3日 (木曜日) [【随想帖 II】](#)

手放し

◎ 手放しの自転車試す青田道

という[砂女さんの句](#)がとても素敵だ。

彼女は、いったい幾つわたしよりねえさんなのかわからない。もしも、途轍もないお転婆であったならば、白黒写真の時代に青春を送ったような、夏には川で泳いで真っ黒になっているような、そんな人だったならば、と想像をして楽しんでいる。

だが、わたしだって、そうも言っておれないほどに老化の波が押し寄せて、中性脂肪がピンと跳ね上がって蒼白になっている。それは6月下旬に定例で行う職場の健康診断の結果のことだ。

結果を見る前にすでに、このごろ、健康の意識して自転車に乗って近所を走り回っている。4度ほど早朝の住宅街や夕暮れの田園を駆けてみたが、若返るような気分になって爽快だった。

(ちっともおなか周りや体重は減らないけど)健康指数良くなってくれ、と願っている。

それで砂女さんの句。

この句を読んで、実はこっそりと手を離して漕いでみた。

ちょっと、ショック…だった。

全国の峠という峠、歴史街道をくまなく二輪で走り尽くしてきたという自信があったわたしであるのに、1年前にバイクを降りて以来の二輪車で、ふらふらだったのだ。

押し寄せる爺(ジジイ)の波は怖い。

砂女さんの真似して(アレンジして)里山散策も試みようかと思っている。

2014年7月19日(土曜日) [【随想帖 II】](#)

神田

むかし、そうだ！1977年のことだ。

ヒッチハイクと国鉄で北海道を旅していたときに列車の中でほぼ同年代の若者に同席になった。その子が「神田なんです」と言ったので、それであうんで、同じ大学だと閃いたということがあった。

神田で反応するということは、こんな瞬間をいう。そのことを[砂女さんのブログ](#)にコメントで書いて、懐かしくなってきたのでここに書き写している。

神田も広いと後になって次第に気づくわけであるが、一昨々年、久しぶりに神保町界隈を訪ねる機会に恵まれて、雨の中にもかかわらず、ぶらりぶらりと歩きまわってみた。

「すっかり変わってしまったな」というのが真っ先の感想だった。でも、本当はそれほど変わっていなかったのかもしれない。久しぶりすぎてそういうセリフを自分で用意していたのかもしれない。

時間が過ぎてしまったのだから仕方がない。ネズミの通る穴まで知っていたのに、ネズミが居ませんね、みたいな。

泥臭くて埃臭い街だったのにちょっと残念だった。



◆ あんみつ

そうそう、餡蜜(あんみつ)のことを書こうと思って書き始めたのだった。

わたしは田舎の子だから、そんなハイカラものは大人になるまで知らなくて、せいぜい、みつ豆の缶詰をおやつに食べたことくらいがご馳走の思い出であった。

神田の大学に通うことになって、そこは喫茶店がたくさんあって大都会だったけど、外でお茶なんて飲んだことはなかった。

講義はそこそこにして、いつも古本屋に立ち寄って、古本を抱きかかえて下宿に帰った。大学からは1時間ほどかかるひっそりとしたわたしの城のようなところで、暢気に暮らした学生時代がある。そんな時代を思い出した。

神田という言葉は凄い。あらゆるものが蘇る。

2014年7月22日（火曜日）【[随想帖 II](#)】

舵を切る

何か言葉で自分を納得させようと考え続けているのがよくわかる。バイクを降りたのは決して諦めたり飽きてしまったからではない。そのことは自らの肌が感じている。

だが、スキッとしないのはどうしてだろう。自分で問いかけて、そこに相づちを絶妙に入れてくれるものがあらわれないからか。

その言い訳じみた理屈付けを乗り越えるために、「もしも」という仮説が飛び出す。もしも、仕事を辞めていなかったら、もしも、今の仕事に出会わなかったら、などなど。



水平線しか見えない遠洋への船旅のような人生のあの時期に、突如、航海を打ち切って船の舵を大きく切った。その先にあったものは、衝撃的で新しい世界だった。もしもあのまま航海を続けたら、新しいものには出会えず無知のままだった。一介の総合電機メーカーの技術者としてある側面では優雅で豊かに、そしてもうひとつの側面では井の中の蛙で終わってしまったのだろう。たとえマイナスが大きかったとしてもプラスがあったところに歓びを感じることができた。

(何よりも大勢の愚かな人々が愚かな会社を愚かな方向に導き社会までも変質させてしまうことができるのだということも分かった)



実際には仕事を辞めて新しいことを始めようとして、それを損なってしまったわけだが、出会ったものが私の心を幸せに導いてくれた。もっと早く二十歳のころに出会えば全く違った生涯を送れただろうにと後悔をした。

だが、冷静に考えると湧き出るように見えてくる人生の筋書きのなかに、二十歳のころに現在の業界のような仕事に出会っていた…というドラマがあったに違いなく、紙一重なのかわたしの失策なのか断定できないが「没」になった。

どこかにも書いたが、曾祖父が村長、祖父が村議会議員、父が公務員をしてきた。皆が社会に尽くした人たちただだけに、わたしだけが恩返しを怠り逃げ出したのは掟破りであったのかもしれない。

人生は一度きりとはまさにその通りで、目に見えない神の導きに出会えなかった不運だとも思う。

急降下のころに、ムスメは受験時代を迎えていた。何がどのように転々とするのか理屈も何もないと思うが、着地点をしっかりと見て、着地するからにはそのモノをよく知り尽くし自信を持って生きてゆく。

果たしてわたしがあのときに感じ得たことは、伝えたい人たちに伝わったのだろうか。舵を大きく切った人生であったが、その舵をこれから引き続きしっかりと操縦しようと考えている。

下りの一番列車



夏の朝は夜明け前から目がさめるので、お手軽に散歩に出られます。
いつごろまで続けられるか全く予測がつかないけれど
8キロほどの農道を自転車で散策してくる。

50分ほどの間にJRが2度通過する。
下りの一番列車と上りの一番列車。

朝日が昇って窓に反射しているというまさかの一瞬。

この汽車の乗ってその先の人を訪ねに行きたいと何度も思った日々
それももう昔のこと。

5時過ぎにこの付近を出て、熊野市に8時20分に着く。

bike-tourist.air-nifty.com > [Apple 散歩\(写真日記\)](#)

2014年8月 5日 (火曜日) [【随想帖 II】](#)

稲刈り



[7月17日](#)に稲穂が出ているのを見つけてから半月が過ぎた。

(8月15日)

列車をおりてみると刈ってあったので驚いた。

稲刈りが早くなったのか、わたしの実家のあるところよりもコチラのほうが早いのか、よくわからないが、櫛田川の水に育てられている区域は水が早く来るのだろうか、稲刈りは早い。

麦を作らなくなったことが一番の理由と思うが、農機具が進化して、夏の暑い盛りでも稲刈りが可能になったこともあるのだろう。むかしのように鋸鎌でゴリゴリと一株ずつ刈り取る作業はこの暑い季節には不可能だ。



きょうは、大文字@京都。

送り火を夜空に見あげて、夏が過ぎてゆくのをじみじみと味わった。

ツマとムスメさんは京都の別邸に行っているが、今夜は雨が降り出すかも。

一方で、熊野の花火大会が17日にある。

コチラは雨の確率は低いので安心のようです。

(ほかの日記はコチラ)

bike-tourist.air-nifty.com > Apple 散歩(写真日記)

2014年8月16日(土曜日) [【随想帖 II】](#)

逢えそうな気がする

▼あの人に会えそうな気がして海まで ねこ

そんなことばを思い出したが、ほんとうにもう一度だけでも会いたい人にはもう二度と会えないし話もできない。わかりきったことなのだが、架空の時間をさまよえる十七音の中でだけでは夢の様なことが書ける。



では、現実に出たい人がいるのかということそうでもなかったりする。

いまさら人に会って昔を語るのもほんの一時凌ぎではないかと思えるし、正反対に、一人でも多くの人に会って記憶の淵を掘り返しておくのもいいかもしれないのだが。

用事もないのだけれど
必ず時間に余裕があると
この海までやってくる。

引き潮が好きであるが、そのときにどうなのかを調べてから出かけてくることもあれば、行き当たりばったりのこともある。

満ち潮だから残念というわけではない。波打ち際がこのコンクリートの堤防を浸していれば、さざ波のサワサワという音も聞こえるのだから、手を伸ばして掬って舐めてみたくなるのだ。

自転車散歩を始めたのがお盆の終わり頃である。この海までは15キロ余りあるのでなかなか思いきれず、ここまでの半分の小高い峠の所で引き返している(8キロ)。この海まで来ようとする国道を横切って幾つもの信号を渡ってくることになる。脇を車が走り抜ける道路も走る。それが嫌だったこともあるが、朝焼けとか夕焼けの美しいときを頭の片隅で期待している気持ちもある。

海岸に佇んでそんなものを眺めても黄昏を感じるだけの年齢でありながら、その黄昏を手探りで探しているような日々が続く。

bike-tourist.air-nifty.com > Apple 散歩(写真日記) から

2014年9月 3日(水曜日) [【随想帖 II】](#)

猫のように

猫のように暮らしている。[砂女さんがそんな表現をしている](#)のを読んで、勝手な想像をふくらませてゆく。

猫のようにはいったいどのようなイメージを持てばいいのかな……と思い、悠々と自由気ままなようにか……などと頭にそんな暮らしぶりを一瞬浮かべてみるものの、アイツらはあれでそれなりに苦労しているのだから、ほんとうは夢のような暮らしなどどこにもないのではないか、と思い直してみたりする。

苦労が多くても満足がいけばいいではないか、と自分に言い聞かせて生きてきた。

鳥のように空を飛びたいという人がいれば、奴らはいつか地面に降りなくてはならない時が来るのだし、地に足をつけて大地を水平に眺めて生きている方がたくましく充実しているのだ、鳥のように空を飛びたいという夢だけを見続けるのが一番幸せなのではないか、と反問を繰り返していた。

ムスメが家にいる最後の夏をまもなく終えようとしている。

夏に掛かるころにはそんな話は具体化されてもおらなかったのに、私が冬に決めなさいという意志表示をしたらコトから転々と進化して結論まで見えるところになってしまった。

まさか、この夏が最後の夏になってしまうとは。

◎◎

周囲の人が猫か犬を飼いたいね、寂しくなるから、という。だが、猫か犬と暮らす日々は容易に想像できるが、現実として考えていない。

鳥は空から大地を見下ろし外敵も少ないように思われがちでも、決してそうはないだろうことはわかる。命を懸けて飛んでいるのだ。

猫だって誰かに飼われて幸せそうに見えるが、猫のほんとうの人生は野良の方が幸せかもしれないし、毎日同じ時刻に餌をもらってご主人の足に擦り寄っていても、別のところで夢を抱いているかもしれない。

◎◎

私にも、猫のように暮らす日々が待つのだろうか。

またはそれとも猫を飼って、猫らしい人生を送る猫を眺めながら共に暮らすのだろうか。



10月。晩秋の台風19号情報を見ながら考える



ちょうど今の季節に書いた昔の[日記](#)を読み返すと不思議にもあれやこれやと鮮明にものごとが蘇ってくる。

■

昔の話といえは一気に時代を50年ジャンプすると

ちょうど、東京オリンピックのときの映像をTVが盛んに流していたので、毎度のことながら思い出すことをメモ書きしておく。

新幹線が開通して新大阪と東京を結んだ初列車の運転席にNHKがカメラを載せて3時間生中継をした。

とまあ、信じられないような話だが、あの時代はそれが凄いニュースだった。

でも、たかが50年じゃないか、されど50年ともいう。

■

赤電話の話で、先日なるほどと思ったこともあった。

知らないという人の年齢層が思っていたより高かったのが驚いている。

(35歳くらいの子に聞くと知らないと言っていたのだ)

赤電話を見ながら様々なことが浮かんでくる。

—

当然ムスメも知らなかったわけであるから、その頃のことを伝えておかねばという気持ちが出てくる。

当たり前のように携帯して持ち歩いている電話である。生活文化や暮らしのスタイルを知る意味でも聞きたくもない歴史に少し耳を貸していただき、是非とも過去に興味を持って知っておいて欲しいことが幾つかある。



昭和50年ころ、東京で学生暮らしをしていたあのころは、郷里と電話で話をしたければ、公衆電話に出かけて行って10円玉を5秒おきくらいに投入しながら話した。

(公衆電話そのものが今では見かけることが少なくなった)今では街角から姿を消してしまった赤電話だが、あのときの電話がその赤電話であった。そしてその電話が設置されていた路地の一角は、たばこ屋であった。これも今では姿を消してコンビニになっていることが多い。

貧しかった下宿生は誰もが10円を40個も50個もポケットに入れて電話をする。それでも足りないときは下宿のおばさんの家に電話をかけさせて取り次いでもらった。(でも金持ちの子でも電話を持っている子は少なかったと思う)

時代は少しずつ変化してゆく。

公衆電話BOXの一般化が進み、街角で用意に電話をかけられる時代が来る。(10円玉の時代が長かったが)コレクトコールや100番通知を利用するいつときを経て、100円硬貨が使える電話が登場し、すぐにテレホンカードが使えるようになる。

このころは下宿生でも部屋に電話を引いている子が増えていた。

しかし、わたしは手紙を書いた。電話はカチャンという硬貨の落ちる音の哀愁のあとに淋しさが残り、言葉は消えてしまうからだったのだろう。

古里の友だちや、会いたくても会えない友だちと交わす手紙は1週間に何通も届いた。

まだまだ手紙の時代で、わたしは下宿を引き払ったときにダンポールに幾箱にもなる手紙の束を残していた。

赤電話はやがて街角から消えて、コードのない電話が常識化され、その電話が個人のための携帯電話へと変化してゆく。



鶏ごぼうごはん



秋も深まって、明日は立冬という晩に
鳥ごぼうご飯を作ってくれた。

少し前に新聞にのってとても美味しそうに見えて
ふたりがそれぞれで新聞を気にかけて珍しく注目をしていたらしく、
2,3日後に何かの拍子にこの御飯の作り方の話が出た。

まさに会話の中で突然同時にそのことを言い出そうとして
出会い頭の衝突のようなものだった。

そういうことはほかにもときどきあるが、
30年も一緒に暮らしていると嗜好が違って
今でも頑固に守っているところがある一方で
自然に似てきているというか歩み寄って新しいモノに仕立てあげているよなものが幾つもある。

新しく夫婦を始める子どもたちにこのことを言葉で説明しても
おそらく理解はしてくれまいと思いつつ、
来年の春の用意を進めている二人を眺めている。

来年からはこんな質素なご飯をときどき食べながら夜を過ごすのだろう。
これからの献立レパートリーに追加されるべきとても嬉しい味飯でした。

手帳

二三年ぶりに手帳を買った。これを買う決心をした日の夜にひとつの歌と出会っている。

あんなにも憎みしひとの去りしのち古き手帳に残る筆圧 砂女
(題詠2014:67 手帳)

この人の前にあるのは「手帳」なのだ。理由は不明だがその手帳を開けている。そこにある「憎しみ」という言葉から発せられる振動が私に届いた。強烈に私に響く。

文芸の才がない私には、ひとが去ったのか憎しみが去ったのか、わからない。そして筆圧は誰のものなのか、最初一回読んだときには、憎しみが去って、砂女さんがあるとき(時代)の手帳を見ている光景を想像したが、そんな単純なものでもいいのか。(勝手に失礼だが)

人がこの世を去って、憎しみが消えて、ある時代を遺した1冊の手帳があり……
考えるのはイケナイコトかも…と思い始めたのでやめることにする。

—

手帳を買うかどうか私は迷っていた。その背中をこの歌は押したのだった。「憎しみ」という言葉が私の古傷を穿るようで、そこで感情は歌から私自身の記憶にスイッチされてしまって、憎しみの回想からくる思いを私は言葉に残そうとして、吐き捨てるように何度も書き直している。(その文章は罫線で区切って付けておく)

□

五十を過ぎて筆圧が弱くなった。大抵のことが許せるようになったから今さら強く書かねばならないような激しい思いを抱かなくなったのだろうか。しっかり字を書こうと迫るものがないともいえよう。しかしその反面、書道や写経をするときのような気持ちで字を書くことが増えた。心掛けてという格好が良すぎるが、努めてせっかちさを排除しようとしている。

字を書くことは座禅のようであり勤行のようでもある。一画一画、部首を考察したり、考え出された時代や考え出した人のことを想像すると禅の哲学の境地に踏み込めるような気持ちである。

□

憎くて恨めしい人間が三人いる。八つ裂きにして粉々にしても気が済まないような人だ。そう書けば血が騒ぐが、座禅を組めば忘れる。

手帳には、つぶやきを書こうと思う。たくさんの色ペンを使って予定も日記も書こう、小さな付箋をいっぱい貼って賑やかな手帳にしよう、そんなことを考えている。

許したふりをしながら、その手帳の隙間には断片的に私の憎しみが滲み続けるのだろう。死んでも正義を問い続けたい。

□□ (憎しみ)

私は罪深いニンゲンだ。愛する人を一時であろうと裏切り、あるときには信用した人に裏切られたのだ。1つの償いは済ませたし本来なら生きられずに罪も償うことも許されなかったかもしれないけど、こうして生きている。だから、憎しみを抱くことなどは許されなくても、それでも私は私を裏切って陥れようとしたそれぞれのニンゲンを憎んでいることを心の奥にしまい続け封印したりしない。

何をいまさらと思うほどに憎しみが湧き上がって破裂しそうになる。その一方で、何を今さら怒ったり憎んだりしたところで何も変わらない、とも思う。モノゴトの流れが変わるわけでもないし、巻き戻してどこかを組み直すことも出来ない。そんなことができたところで誰にも幸せはこないだろうという冷めた気持ちがある。

世の中の大勢が言う「憎しみ」と言うものは、まだまだ甘っちょろいものだと思う。(私が持っているような)ほんとうの憎しみとはコレだ！と手にとって見せることができるならば見せて教えてやりたい。世界が滅びてもいいほどの憎しみを持っている私は罪深い人間だ。

憎い奴の胸を引き裂いて切り刻んですり潰して焼き焦がして火山の噴火口にも捨ててやっても気がすまない。出来る限り残虐で出来る限り苦しい罰を与えてやりたい。

参照作品: 砂女さんのブログ

[雨降茫茫日々記](#)から 2014.11.15

[1249](#) あんなにも憎みしひとの去りしのち古き手帳に残る筆圧
(題詠2014:67 手帳)

2014年11月18日(火曜日) [【随想帖 II】](#)

幸せ

ツマに

—— 今まで一番幸せやったときっていつ？
三つくらいあげてみるか。

と、何気ないふりを装って尋ねてみたら

—— 結婚したとき。
[子ども]が生まれたとき。
それから、大学時代も幸せやったなあ～

そんなふうにつぶやいて、むかしを振り返るようにその頃を懐かしんだ。

今現在が幸せではないというではない。

心のなかにどれほど幸せを感動として残しているかということや、幸せとは何かというような普段から言葉で定義しないようなものをどのように心に仕舞いこんでいるかに触れてみたかったのである。

□

このことでじっくりと考えてみたり、自分を見つめてみると様々な思いが次々と湧いてくる。

しばらく、ぼんやりと考えてみようか。



写真は本文と無関係

bike-tourist.air-nifty.com > [Apple 散歩\(写真日記\)](#)

餅つき

bike-tourist.air-nifty.com > [Walk Don't Run](#) (写真日記)



餅をついて丸めているところを撮影したものが出来たので記録しておく。
平成13年12月29日とデジタルデータには刻印されている。

◎

このころは、母も年老いて、弟に手伝ってもらいながら餅つきはするものの、この台の上で延ばして片付けていだけで、丸いお餅を幾つも作るようなことはしない。

あずきと大根おろしでそれぞれ2, 3個食べるだけ、つきたての餅からちぎり取ってみんなで食べて、残りはうす餅(一般的にはのし餅と呼ぶかも)にしてしまい後で切る。

丸い餅より切らずに保存するほうが合理的と考えているようだ。

◎

餅は丸いもの。そういうものだ。

おにぎりは三角であるし、おでんのこんにゃくは三角で、卵は丸い、トーストのパンは四角、だから、お餅は丸い。

丸い文化が段々と消えていくのは、高齢化も多かれ少なかれ影響している。消滅していいものとそれを許されないものと考えるかの境目も時代とともに変化する。

変化の速度が人の寿命と比較して著しく遅い場合は何ら問題ないし昔からも問題にされてこなかったが、人の寿命が2, 30年伸びてさらに文化の変化周期が2, 30年短くなったから、消滅するものを惜しむ人が増えたのだろう。

味に差異がないならば、形には丸か三角か四角くらいしかないのだから、巡り巡っていつかまた丸いお餅の世紀を迎える時が来るのかもしれない。

2015年1月 4日 (日曜日) [【随想帖 II】](#)

死に際の一週間

21日に小さなケーキを母に買っていった。誕生日だからケーキなのだが、長い人生でもお祝いにケーキを持参することなどは殆ど稀なことであった。

喜んでいたのかどうかは計り知れないものの大切に冷蔵庫に仕舞っていたのであの夜かあくる日にでも食べただろう。

22日はおとう(父)の命日で、67歳を目前にして逝って以来初めて迎えるひつじ年だ。年月は早く過ぎると言いながらも、たっぷり、じつくりと84歳まで辿り着いた。

○

ストーブにあたりながら死ぬ間際の話になった。

「痛い思いも辛い思いもしないでストーンと死にたい」

「夜眠ったら朝には冷たく息が止まっているような安らかで突然の死がいい」

というようなことわたしが言うと母は即座にそれを否定して

「一週間くらいはしんどくても死に際らしい終わりを送りながら大勢の人に次々と別れを交わしてから死にたい」

そんなことを言うので些か驚いたのだが、年寄ると死に対する恐怖もあろうと思うものの、世話になった方々ときちんと儀式を交わしたいと考えてのことだろう。一週間くらいは生きていて、といいながら、心臓が子供の頃から弱いので心臓麻痺で死ぬと思う、とも話していた。

○

阪神淡路大震災、オーム真理教事件と事件や災害が起こる直前の師走に大腸のまわりを切れるだけバツサリとやってもらった大腸癌だったが、再発もなく生きてきた。「命拾い」とはあのようなときに使うのだろう。両手サイズほどの大きな肉のパックを見るたびに、あのときに切り出して医者が見せてくれた肉の塊を思い出す。

葬式は派手でなくとも立派な墓でなくともいいと言葉にしたりしながら覚悟を自分に言い聞かせているようである。まあ、墓は粗末では済まされないし済ますこともないから心配しなさんな。

せっかくここまで生きてきたのだから、まだまだ生きて欲しいし、願いを最後に叶えるならばそんな一週間を贈ってやりたいが、魔術師でもないわたしだから祈るだけである。

一方、父はこの22日に逝ったのだが、最後に言葉を交わしたのがいつであったのかとかその言葉がどんなものであったのかさえ全く記憶にも記録にもない。母のときはきちんとしなくてはイカンと思っている。

2015年1月23日(金曜日) [\[- Walk Don't Run -\]](#), [【随想帖 II】](#)

節分や年に一度の鬼の影 ― 節分号

お豆はストーブの上で煎って食べるとおいしい。
食べながら子どものころを思い出していました。

部屋には炭を起こした火鉢があり、あられを煎ったり餅を焼いたりしました。

ストーブを炎の出る赤外線タイプにしたので、お湯を沸かしたりお餅を焼いたりします。

もちろん焼いた豆は香ばしくておいしかった。

子どものころは、何でも焼いたものです。
干し芋、スルメ、お餅、あられ、かき餅、落花生など。



[新・写真日記\(27\)](#)

2015年2月 3日 (火曜日) [【随想帖 II】](#)

刻一刻と過ぎゆく時間

【- Walk Don't Run -】遺す言葉 のシリーズのなかの15番目

遺す言葉 — 15

向き合うということ — 平成25年秋へと

- [脳梗塞 その1 — \(お見舞い\)](#)
- [脳梗塞 その2 — \(面会\)](#)
- [脳梗塞 その3 — \(その人\)](#)
- [脳梗塞 その4 — \(暮らし\)](#)
- [脳梗塞 その5 — \(現実\)](#)

に関連する話を書きます。

1年半前にお見舞いに行きました叔父が23日の朝になくなりました。直接の死因はまだわたしには届いてこない状況ですが、わたしの父が66歳、もう一人の叔父が70歳、そしてこのたび亡くなった叔父が一番弟で75歳で逝きました。

男性は3兄弟でみんな短命です。ガンなどのような手ごわいとされる病気ではなく、ごくありふれた身近に耳にする病気ばかりです。もちろんありふれた病気を軽視するわけではないのですが、早くから病気の症状を予測して対処をしていたにも関わらず、儚くも短い結果となりました。心臓が特別に弱いと言われたわけでもなく、タバコは早々に控えて晩年は断ち切っていましたし、食事の栄養配分や塩分濃度などにも気をつけている(夫婦の)対話を何度も耳にしました。

短命とは、運命でないか、とこのごろになって確信を持っています。だから、どう騒ぐわけでもないし、対応することもできない。あり余るほどに飛び交う情報を大切に手をつつことも、それほど精一杯できるものでもない。

現在という時間が流れている一種の時空間には、地球とか太陽系が支配する時の流れというものがあり、それによって時間が定義され、人間の生命の周期という80余年の寿命・節目が存在するにすぎない。だから、運命が人それぞれである以上、周期に差異があっても仕方がないし、カラダは千差万別であるわけで寿命もそれぞれでしょう。

だから、わたしも短命の血脈をいただいているわけですし、刻一刻とそのときに近づくわけです。

2015年3月23日(月曜日) [【随想帖 II】](#)

きっと転びそうな予感

[雨降茫茫日々記 > 1277](#)

というブログを拝読したあとに勝手随想しているが、何らコメントにもならないわたしの戯言なのでコチラにあげてTBの印だけを残すことにする。

□

むかし、転ぶという言葉がそれ自体も響きも嫌いだった時期があって、高校に不合格になったときも大学に10箇所以上落ち続けたときも、進級の壁に立ち向かうときも、わたしは転び続けたわけでした。

師よ何度転べばよろしかろう七度ですか

そう得体も知れず目に見えぬ自分の心の奥深くの影と対話を続けた。(目にも見えぬ)師は優しく、八度起き上がればそれでよろしい、などとは言わなかった。

それでよかったのだ。いつまでも寝転んでいるわけにもいかないし、はたまたいつまでも大空を見あげているわけにもいかないのだから、大急ぎであれ、やれやれと…であれ、起き上がるのだ。

無資産で貧乏な家に生まれて、他人に迷惑をかけたりするのを恥と思う人間であったはずだが、妙に夢だけは大きかったのかもしれない。親にだけは多大な迷惑をかけて東京の大学にまでやってもらった。けれども、ムスコは大馬鹿息子のままだった。村長や村会議員をした爺さんや曾祖父さんが三つ子までのわたしに何を囁いたのかは、今となっては全く想像できないのだが、母が言うように脈々と流れるグウタラな血が流れているようだ。

ちょっと起き上がるまでにナマクラをし過ぎて情けない暮らしをしているのだが、わたしが次の世代に何を伝えられるかにかかっている。ムスメ1人だったので結構バクチみたいになっていることは否めないが。

☆春雷や善きひとはみな先をゆき

☆まだすこし遊び足りない春灯 砂女

砂女さん、ちょっと弱音を吐きかけたなんてことはないと思うが、ナマの声は届いてこないからそれはわからないままで。

ただ、転んでみて地面の低さまで視線が移動して、転んだ数を勘定してしまったら、ついでに歳の数も勘定したのかどうか、弱音だとは決して思わないけど

でもまたきっと転びそうな気がする

なんて書いているから、ちょっと笑って飛ばしておこうではないかと考えた。

□

ニンゲンの記憶脳っていうのはタマネギと同じような構造で、外から(新しいところから)段々と腐って剥がれているのです、なんてのをTVに出てくる科学者が話すのを聞いて、なるほどと思いつつも、そんな科学よりも……と、また別のことを考えていた。

科学が進化するの結構ですが、どうだっていいことはたとえ面白い科学であろうが追いかけるのをやめて、もっと糞の役にも立たないことで心を豊かにできるようなものはないものか、などとわたしは捻くれてみる。

捻挫が3日ほどで治ったとかいう記憶の突然変異と脳科学とが関係するのかどうかワカランけど、人の記憶とはとても曖昧なものであることを、先ごろわたしも体験した。

10年ほどむかしに新採で配属されてきた一人の女性がいて、彼女は転々と異動しながら着々と大人になってられ、先日、久しぶりに話をする機会があったのだが、あまりにも雰囲気記憶と食い違ってしまう(別人かもしれないと不安になって)躊躇した。

高校時代の数学の先生が(≡定年だったのだ)、新人のころの教え子と再会したら顔は全く覚えていないが声を覚えているものだ、声は変化しないよ、と仰っていたのを思い出した。なるほど。人間の骨格は変化しないから、声の周波数帯域は変化しないわけか。

転ぶという現象は、うっかり屋さんという心理的な側面もあるが、カラダの構造的な(解剖学的な側面の)ことにも起因するならば、死ぬまで治らないのかもしれない。つまりは、よく転ぶ人=いつまでも転び続けるのだ。

いつまでも試験に通らなかった昔を思い出して、ほとんど納得をした。運命だから付き合うしか無い。

新・写真日記(27)



2015年3月25日(水曜日) [【随想帖 II】](#)

半券

ふとしたはずみで、財布の中から、印刷の薄れかけた切手大のチケットが滑り落ちた。

と書き出している。

それはそれは

短歌と、日々と、普通のごはん。

のなかの

ボートの半券 2015.03.21 Sat

から

カメラには収めぬ一日があふれ出すあなたの漕いだボートの半券

(万葉の里・恋のうた募集「あなたを想う恋のうた」で優秀賞)

◎◎

近代の短歌でもとくに放送や情報のメディアが人々に歌というものを紹介する機会が増えてから急速にこのような歌がその潜在的な力と美しさを隠すことなく届いてくるようになったと思う。それだけに短歌というものが俳風柳多留のように歴史のなかに定着してゆくようなことがあるのだろうとふと考えてみる。そのなかから光り輝くものを見つけてくる。

どうしてこの作品にひきとめられるのだろう。

不思議なチカラが漂っている。しかし、不思議なんていうものはそもそもこの世にないと思っている。何でも解明できるはずだ。だが、魂の存在の証明は困難かもしれないが。

では、どうして惹かれるのか。

それは、この人が半券を棄てずに持っていたことで優しい心と哀しむ心を持ち合わせていることがうかがい知れるからだろう。好きでなければ持ち続けられないものを持ち続けながらも「はっきりした関係でな」と書いているのに本当は好きなのだ。好きなら好きといえはいいのに世の中や人生というのは意地悪なものでやたら好きだと正直に振る舞うと大事なところをも逃してしまったりすることもある。じつと控えめで淑やかな人が重んじられたりするのを良しとする長い歴史があるのもそのせいだろう。

好きなら好きといえはいい。

ところが、言ってしまうとオシマイよ。寅さんじゃないがそういうことってよくある。だから、幾分打算的であるが秘めてしまうのだ。

恋愛上手になることもない。

だが世の中上手な人がいるのよ。まあ、わたしも直ぐに人に惚れてしまって哀しい想いを何度もしてきたけれど、哀しかったからといって死んでしまいたいわけではないし生きている元気を失ったわけではない。まあ、スイーツとご飯は別腹という人の言い分に似ているかもしれないかも。

でも恋愛上手はお得なことが多いかも知れない。

出会って間もない女の子からすぐにメールや連絡方法を聞き出しているわたしを見て、そのことをツマがケラケラと笑って困った人だと呆れて顔をしかめている。そのくせわたしたち夫婦は仲良しであり、でも、相性チェック100の項目テストをすると95%くらい不一致である。ほんと、誕生日と血液型だけがバッチリと讃えてくれるだけで、ツマはそのことだけでとても喜んでいるからそれでいいのだ。

この短歌の作者は写真のことを少し悔やんだのだろうか。

でも悔やんでも始まらないのだから、諦めが肝心と思ったのか。わたしはこの人のことをここにある文字と言葉からだけしか想像できないけどこの人は「やっぱし写真欲しいなあったらよかったな」と思ったに違いない。めっと(面と)向かって話ができるのだから「写真なんて諦めなよ半券のほうはずっと思い出深いよ」と言うところかもしれないが、人の心はないものねだり、半券をじつと見つめてそのときの情景をそこに映し出して目を閉じるしかないこの人の気持ちは辛いほど伝わるのだ。

写真があればそこでストップかもしれない。

そんな非情なことも言えないけど、わたしの時代には写真なんか簡単には撮らなかつたし、撮れなかつた。頼りになるのは自分の心にとどめた記憶だけだったのだ。

この恋で懲りちゃいけないよ。

とわたしは言うてしまうかもしれない。辛い思いをした人は、引込み思案になったり迷って道を選び損ねたりする。でも、しくじるときはみんな誰だって同じなんだってことを考えればわかるのについつい自分は不運だからとか性格が悪いからとかあそこがマイナスだからとか、まあいろいろとよく考え着くなあとと思うほどにマイナスに連想を進めていってしまう。

わたしの部屋のガラクタ入れのなかに

24歳のときに一緒に京都に行こうと強くプロポーズした一人の女性の写真が何枚も残っていてその写真のことをツマはよく知っていて今でもわたしが不安定な気持ちで家にいるときにチラリとその話をする。わたしもわたしで、棄ててしまえばいいものを持っている。もう絶対に会えない人なので大事に持っていてゴミにしかならないのだけどそこに引き出しがあるから放り込んだままになっているのだ。

24歳は就職して社会に飛び出す記念的なときで、

その行き先が京都だった。6年間住んだ東京を離れることにとても寂しい思いを持っていたのだがその辛さや重さは自分でも言葉に出来ないほどに得体のしれない波だったのだ。でも、あっという間に忘れてしまう。本当は忘れてしまっていることはなくて何度も決まった場所が夢に出てくるし決まった路地で必死になって探しものをして駆けずり回っている自分がいるから脳味噌の中には記憶しているのだろうけど、わたしは忘れたと思っている。もしいま、街でバツタリ昔の友に会ったとしても、けっこう気付かずに行き違ってしまうかもしれない。実際にそういう事例がわたしには幾つもある。記憶というものは至って曖昧で、形を表すものは儂い。

だから

半券でストップする。

この半券で物語を終えてしまう必要があるのだ、

ドラマでも映画であっても。

わたしは卒業式を小中高大と4回やっているけどどのときも悲しくなかつたし人一倍涙腺が弱いのに泣かなかつたのはきつと次の扉を開けて次の世界を見ていたからなんだと思う。この歳になると次の世界の扉って「他界」に行くあの世への扉だったりすることもありそうだけど、それでも結構楽しみにしている。

新しい恋をしたいと密かに思っているのかもしれない。



落書き

[新・写真日記\(27\)](#)

4月7日(火)

落書きは駅のホームの、小さな屋根がある木のベンチの後ろの掲示板に書いてある。ポスターなら10枚ほど貼れるところだが、一枚も貼ってなくて、去年あたりは安全啓発のJRのお知らせがあったのだが、それさえも剥がしてしまって、画鋲が転々と錆びついて残っている。その壁にこの落書きはあった。

この駅から1キロほど離れた中学と2つの高等学校の生徒が乗り降りするくらいで、通学時間から少しずれて利用するわた

しはせいぜいクラブ活動などの数人がベンチに座っているのを見かけるくらいだ。

落書きを書いた犯人一味は、この学校の生徒であろう。屈指の進学校である生徒たちにも切ない思いは在るのだ。さて。

松尾くんって誰だろう。

消してあるじゃないか、意味深だ。

そうだ、書いてからしばらくして、別の人が消したのではないか。

などと推測の声が飛ぶのが聞こえてきそうだ。

落書きに意味はない。

あの瞬間の激しい時間が埋もれている。

書いた張本人のキミだけの宝物なのかもしれない。

2015年4月10日（金曜日）【随想帖 II】

もうすぐ死ぬと悟った人たちが、何を後悔しているのか

日々あふれるほどの情報のなかで偶然に目にとまるものがわたしに何かのヒントを与えてくれることがある。この言葉もわたしをおやっと思わせてくれたものだった。

「死への準備をするということは、良い人生を送るということである」とトルストイが本当に述べたかどうか。今の世の中こんな記述情報があるとあつという間い広まって神秘性はあやふやのまま。本当に大事なものは情報にチャホヤされていない冷たい視線だと思う。

記事は「もうすぐ死ぬと悟った人たちが、何を後悔しているのか」を取り上げようとしていた。

17項目をあげてはいたけれど、商業雑誌だから、わたしから見たら無駄も多い。

◆1 他人がどう思うか、気にしすぎなければよかった

これって、もうすぐ死ぬ人が悟るような内容じゃないだろう。

而立の年に知るべきことだ。

◆2 他人の期待に沿うための人生ではなく、自分が思い描く人生を歩めばよかった

これも死ぬ前では遅すぎる。充実している時期に気づくべき。

◆3 あんなに仕事ばかりしなければよかった

このへんまで読んでくると、いかにみんな死に際まで何も考えてないかってことがわかってくる。

◆4 もっと一瞬一瞬に集中して生きればよかった

一瞬一瞬に一生懸命に生きるなんてことは、死ぬ間に後悔することではないだろう。

これまで何を生きてきたのか、疑ってしまう。

◆5 喧嘩別れしなければよかった

すこしグサリと来る出来事もあったが、死に際の後悔にはならないだろう。

◆6 もっと他人のために尽くせばよかった

このことは、死に際ではなく、還暦あたりで気づくべき。

◆7 もっと家族と一緒に時間を過ごせばよかった

論外ですね

◆8 友達との時間を大切にすればよかった

いったいみんな、どんな人生を歩んでいるのか。

◆9 もっと旅をすればよかった

段々呆れてきた。

◆10 リスクを恐れずにいろいろ挑戦すればよかった

三十代にこういうことに気づき五十歳くらいには充実してチャレンジしているべきで、やはりぼんやりと生きてきた人が言う言葉だ。

◆11 もっと自分の情熱に従って生きるべきだった

正直に生きてきたわたしにはこの後悔はわからない。

◆12 あれこれと心配し過ぎなければよかった

こういうことって後悔することなのかという疑問のほうが大きい。

◆13 もっと自分を幸せにしてあげればよかった

わたしは幸せでした。貧乏でしたが。

◆14 周りの意見よりも、自分の心の声を信じるべきだった

理解に苦しむ。

◆15 愛する人にもっとたくさん気持ちを伝えるべきだった
伝えてきましたから、わたしは。

◆16 もっと幸せを実感するべきだった
幸せとは何かという原点に帰る話になります。
普通に生きてれば、精一杯幸せを目指すと思うが。

◆17 もっと時間があれば・・・
死ぬ間際に言う言葉ではないだろう



新・写真日記(27)

こんな日記 書かなければよかった……と思った。
しかしながら、このようなことを考えている現実的な側面がこの世に存在することに大きな社会の悩みがある。
その悩みはスパイラルになって増殖してゆく……

2015年4月20日（月曜日）【随想帖 II】

春 着々と夏に向かい

四月中旬に雨降りが続いてそれが2回連続して週の初めの月火に襲いかかり、傘をさして出かける日が続いた。

2回続けばうんざりして今年はやう降る春やと弱音めいたことも言ってみたくなる。しかし、そのおかげでというわけではないのだろうが、グッドタイミングで田植えが一斉に始まっている。

ムスメは三月二十日ごろに異動して新しい暮らしを始めた。本人たちには気の毒なことではあるもの、そんなテーマに幾つか出会いながらも着々と成長してゆくのが想像通りというか期待以上に嬉しい。

二人には信じられないほどボロボロの官舎で、温水シャワートイレを思い切って取り付けることにしたのはいいのだが、工事当日に電気コンセント設備がトイレにないという全くの想定外のことも起こった。何しろ生まれる前の建造物で、その時代のお風呂のカマであり給湯器であるのだ。

慣れないのだが夕飯も作っているし雨降りには傘もさしてバス停まで歩かねばならない。帰りが遅くなると家の近所まで行けるバスがなくなるなど悩み事は尽きなかったようだ。

bike-tourist.air-nifty.com > 進化する [おゆうはん](#)

しかし、新婚というのは恐ろしいパワーを持っているということを思い出させてもらった。



今考えてみると、京都で4年間自立して暮らしたことや、2011年の熊野市大水害の経験など、目に見えない事件が骨身になっているのだろう。

考えて、工夫して、目標に少しずつ近づこうとする心構えと行動が大切だ。

2015年4月24日（金曜日）【[随想帖 II](#)】

過去への落し物

ここまで忘れていたのだから困っていないだろうということが過去への落し物みたいな気持ちです。

――

NさんがSNSへのパスワードを
うっかり忘れてしまったときの
その後のコメントで
「過去への落し物みたいな気持ち」
と書いておられて、

わたしはその言葉のことで考え込んでしまう。
彼女が言いたかった真の心の内とは何なのかがぼんやりだったので、
もう少し正体を突き止められないかと思うほど迷路に入っていく。

だからすぐには返事めいたことも書けずに
この一節をメモに書き置いたまま睨み続けた。

睨んでみては諦めて
感情を冷ましてみては
もう一度睨んで考えた。

落し物ってなんだろう
自分の手から離れた瞬間に
もう棄てられてしまうかもしれない宿命があったのかな

それはないでしょ
落としかくて手から離れたわけじゃない。

でも
手から離れた瞬間に
自由になれたと考えれば
どうだろう。

人生の完全燃焼ストーリーのシナリオから
落し物のように遊離して
私は今の人生を歩んでいる。

落し物って
あいつら
いつか誰かに拾って欲しいと思っているのだろうか。

濃密な文章で反時代的な私小説を書いた
直木賞作家の車谷長吉さんが17日、死去した。
うーん。残念。
たくさんの直木賞の中でも「赤目四十八瀧心中未遂」は特に素晴らしい作品です。
おもいきり真面目に感想も書いている。
もう一回読もうと思う。

――

[車谷長吉「赤目四十八瀧心中未遂」](#)

- 上手に生きてゆけない男が、身体が震え上がるような女性(アヤちゃん)に出会い、名門の出であることを密か……



[BOOKs\(読書日記\)](#)

2015年5月19日(火曜日) [【随想帖 II】](#)

おゆうはん前にかぼちゃでまあ一杯

[新・写真日記\(27\)](#)



名古屋に出かけてましてん(17日)

東急ハンズとかJR高島屋とかを少しだけブラっとしてお休みのはんこを買って帰ってきたのが日記的な面白い話題かな。お昼は黒豚庵というところで「豚しゃぶ冷やしうどん+カツ丼」を食べてそのあとにお皿やお椀やお鉢などをみたりガラスのコップや文房具などもみたりしてまあふつうのデート風のお買い物。ドトールで冷たいコーヒーを1個買ってお持ち帰りして快速に並んでいつもより早めの時刻に帰ってきた。あさりを買ってスパをしようといいながら駅からの途中で寄ったスーパーで半額のステーキを見つけて予定が変更になったこと。久しぶりにお肉を食べたこと。にんにくを買い忘れていること。そんなにふだんと変わらない。

◎

このごろをときどき振り返るたびに毎日に飲み過ぎているのを反省しているので今夜こそは控えるからと言って朝に家を出るのですけれどもおゆうはんの時刻になって飯台に座るとかぼちゃが三切れ入った小鉢とそのとなりに水と氷の入ったグラスを出してくれますのでまあ一杯ということになるわけです。

[続く](#)

2015年6月18日(木曜日) [【随想帖 II】](#)

題詠ブログ

[題詠ブログ](#)を楽しませてもらっている。といってもわたしは拝見して楽しむレベルの立場である。

「激減」している投稿数に不安を感じて、それが引き金となって継続を悩んでおられるらしい。誰もが同じ状況だったら悩むとことと思います。

歌を愛するゆえに安易な判断で方向を決めてしまつては、自分に納得がいかないし、読者の皆さんにも申し訳ないという気持ちもあるのでしょう。

そうはいつでも、激減という数字は現実の前に重くて厳しい。

今のネットを(ひいては社会を)俯瞰的に見渡せば、わが身勝手に好き放題のうえに、安易に割り出される情報やその指標に烏合が流されるように群がっていきます。そこにいる人たちの多くにはモノの本質を見極めるつもりもないし、見極める力も、その潜在的な希望もありません。

所詮ネットや社会がその程度のものだと言い切ってしまうには、寂しさや悲しさもありますし、少し見切りが早いかなと思うものの、社会を動かす流れはまだまだ今のままでしょう。新しい流れなどは到底期待もできない。

ツイッターやブログでいち早く短歌や俳句を楽しみ始めた人たちが、数年前まで遡ってどれほど最初に描いたユートピア的な歌や俳句の世界を続けているのでしょうか。

ご本人は何にも変化していなくても、潮流が随分とみなさんの姿を捻じ曲げて行っているように思います。

様々な人がいます。自分にだけ注目して欲しい人、高く評価をして欲しい人、本当に上手になりたい人、上手な人の中で黙って鑑賞しているだけでいい人、こっそりひっそりと参加していこうと思う人、歌会の参加を狙う人、賞を狙う人などなど。

しかし、濁流のような流れが、個人の価値観や楽しみ方、生き方までも、脅かしてくることもあります。

自分流を守って生きている方々もたくさんありますが、勝ち組・負け組などという言葉がチャホヤされた潜在性は未だ根強いものがあります。

正しかろうが善かろうが(劣悪であろうが紛いもんでであろうが)多数決的な勢いで物事が進むことは日常です。

題詠ブログをみんなで守って、しっかりとした「詠む」「詠みあう」文化を作り継続していきたいという気持ちは痛いほどよくわかります。

参加する側の人々の技量や気持ちは素晴らしくとも、しかしながら、育んでゆく土壤がこれから頼りになるという確信はありません。

様々な意見が様々な方向から出ると思います。決して均等な母集団から湧き上がるものではないと思います。それらゆえに判断が難しいし、やめれば復活は難しいという心配もなさっています。

しかし、誰のためにとって、それはご自身のためにも、一旦ゼロにしてしまう勇気も必要と思います。

本当に不可欠で、またパワーがあるならば、必ず姿を変えて甦ることのできる時がきます。わたしはその新しい姿がとても楽しみです。

—

([題詠ブログ](#): 五十嵐きよみさんが主宰しておられる歌を詠みあうイベントのブログです)

サンマ



[写真日記\(平成27年版\)](#)

▼ [初サンマあっち向いてほいで右向いて](#)

お皿を買ったので魚などの和食を乗せてみたくなる。イオンの食器コーナーの棚に季節モノの器が並んでいたの思わず目が行って落ち着いた面持ちの違った形のを二皿買った。

夫婦ともにサンマを食べたいと思っていてお互いがそのことをハッキリとは強調し合わない。しかし、サンマがちょうど乗る横長の皿に目がゆくと視線同士がそこでぶつかっているのがわかる。

その皿ではサンマしか食べられないから…という理由で万能なカタチの小さなものを買うことになったのだが、サンマをどうぞというようなあの横長の皿に刺し身ともう一品を並べて盛ってもええなあと考えたりもする。

夢は空想に入っていく。呑兵衛というのはロマンチストなんであろうか。

□

サンマは、結局のところこの皿を買った日には値段がまだまだ高くて買わずに帰った。300円の値札がついていたので200円を割ったら買おうではないかと意見が一致した。

スーパーのチラシに185円というのを見つけたのは今朝のことだった。更に、ツマがパートの帰りに別のスーパーで「新モノ150円」と魚屋のマイク(録音)が叫んでいたのを聞いたという。

夕方にもう一度その店にツマは出かけて行ってわが家の食卓に2匹のサンマが並んだ。

少し痩せぼしである。

2015年8月29日(土曜日) [【随想帖II】](#)

意地っ張り凧吹いて拗ねている1

□ 意地っ張り凧吹いて拗ねている

12月4日の夜中にこんなことを書き残している。

わたしは拗ねるという言葉を使うのが好きなようで、その訳は何となく自分でもわかっている。

わたしはよく拗ねる子だった。母からそのことを何度も言われて決して責められている訳でもなかったのだろうが、そんなところで拗ねてはイケナイのだと叱られたことが多かったのだろう。

人が(子どもが)拗ねているのを見るのは好きではない。だが、物語の成り行きで人が拗ねるようすというのは不可欠であるドラマの場面を作りやすいのではないか。

人は甘えたいものだ。動物だってきっとそうだろうと思う。

拗ねるという行動は、甘えている行いをバツサリと切り捨てられて立ち直ることを要求されたときなどに、自分の甘えが実現できなかったことへの不満の表現形の1つだ。

悔しさが伴うこともあるだろう。どんな理由で意地を張らねばならなかったのかは今となっては想像の彼方だが、単純に解釈して、予想もしなかったのに凧が吹いて何か願いが叶わなかったからふくれっ面になっていただけだろう。

わがままとはそんなものだ。

うちの子は、わがままも言わなければ意地も張らないし拗ねもしない子であった…と今ふと思った。(今のところわたしには)まったく想像の付かない人と一緒になって新しい家庭を築こうとしている。

わたしの時代が終わったのだからと考えが行き着き、凧が吹いただけでわたしは拗ねていたのかもしれない。

□



ほんの少しのわさび醤油でいただくと格別に旨い